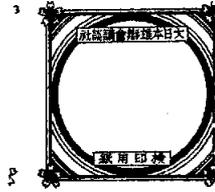


有共者行發者著は權作著書本

昭和十年五月十日印刷  
昭和十年五月十八日發行

釋義と真叢書  
傑作淨瑠璃身

製複許不



著者 樋口慶千代

東京市豊島區駒込五丁目九百七十五番地

發行者 野間清治

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

印刷者 井上源之丞

東京市本所區飯橋二丁目二十七番地ノ二

印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地

大日本雄辯會講談社

(振替東京三九三〇番)  
電話(34) 代表 五六三〇番  
牛込(34) 六二〇〇番  
五六三〇番

(本製地海天)

清お  
十な  
郎つ  
五ご  
十じゅ  
年ねん  
忌き  
歌うた  
念ねん  
佛ぶつ

## 解題

寶永六年正月二日から、初めて大阪の竹本座に上演されたもので、三卷に分れてゐる。作者は近松門左衛門である。

## 出處

播州姫路但馬屋の手代清十郎が主人の娘お夏と密通し、且つ主人の金を盗んだ嫌疑を受けて死刑に處せられた年は、本曲の題名に「五十年忌」とあるより逆算すれば萬治三年に當る。

お夏が美女であつた事は、本曲及び西鶴作の「五人女」卷一にも見え、「忘花」(元祿九年刊)卷之一、天王寺のみづ茶屋の條にも、「かづらきやのおせんは姫路一番の美人おなつ此かたのてきもの」とある。

なほ「玉滴隠見」(寫本)に、姫路の但馬屋お夏の家は寛文二年に潰れた事が見えてゐる。

「亂歴三本鏡」(享保三年刊)四之卷、片上(備前國)の辻堂の條に、「不器量でも片上のお夏を見よ、あれこそ日本に名を流せし播州姫路但馬屋お夏がなれの果、手代清十郎とせせくり合ひ、あげくの果にお夏を盗み出し大坂へ立退きしが、主人の娘をかどはかせし咎逃れず、終に顯はれ二人共姫路へ引戻され、清十郎は首を刎ねられ、お夏はいたづら者と浮名立ち嫁入の口なく、二人の親はころり山椒味噌、兄弟なれば誰取揚ぐる人もなきの涙、身ずから此片上へ引越し、生れながらの後家となり、茶見世を出して旅人の足を休め、茶の錢取りで渡世とす、當座はお夏が茶と持囃せしが、次第につむりの雪山をなし、下地の悪女に寄る年の、額に轍も寄來るや、行くも來るも脇目して立寄る者なし」とある。このお夏の話は、西澤一風が例の作り事であらう。

本曲以前にお夏・清十郎の事が歌舞伎に仕組まれたことは、西鶴作の「五人女」卷一、命のうちの七百兩のかねの條に、「其比は上方の狂言になし、遠國村々里々迄ふたりが名を流しける」とあるので知れる。また「外題年鑑」に「お夏清十郎笠物狂 寶永二年十一月二十一日竹本座」とある。歌舞伎の方も淨瑠璃の方も、其の本が未だ發見されぬから何とも言へぬが、本曲は或はこれ等に據り、また「五人女」卷一をも参考したのであらう。

## 「五人女」卷一の梗概

室津の酒造業和泉清左衛門の子に清十郎といふ美男があつた。十四歳の時から遊里に通ひ、放蕩に身を持崩し、十九歳の時父に勘當され、檀那寺の永興院に送られて出家させられた。其の後彼は寺を逃げ出で、姫路の但馬屋九右衛門といふ内に奉公して手代となり、正直に働いた

ので主人の信用を得た。九右衛門の妹にお夏といふ美人があつて、清十郎に思ひつき文を取りかはして相思の仲となつた。が、娘が兩人に間違ひの起らぬやうに氣を付けてゐるので、兩人は楽しく話合ふ機會がなかつた。

或日但馬屋の者どもが春の野遊びを催した。清十郎は同伴の者等が獅子舞を見に幕の外へ出た隙を窺ひ、お夏と情を通じた。かくて後、清十郎はお夏と共に大阪に行かうとして家を脱走し、飾磨の濱に來て乗合船の中に身を潛めた。其の船が一里ばかり沖へ漕ぎ出た頃、乗合客の中に飛脚がゐて、人からことづかつた狀筋を置忘れたと言ひ出したので、船を引返す事になつた。船が汀に著くと、姫路からの追手の者どもが寄り來て船中をしらべ、お夏を見附けて嚴重な乗物に入れ、清十郎には繩を掛けて姫路に送つた。折から但馬屋の内藏の金戸朔に入れてあつた小判七百兩が紛失してゐたので、これはお夏が盗み出して清十郎に與へたのであらうとの嫌疑がかかつた。清十郎はこのあかしが立ちかねて罪人となり、四月十八日死刑に處せられた。時に年二十五。お夏は十六歳であつた。其の後六月の初めに七百兩が車長持の中から出たので、彼は無實の罪に問はれて死んだ事が知れた。

お夏は愛人が殺された事を知らず、物思ひにくれてゐた。すると里の子供等が袖引連れて、「清十郎殺さばお夏も殺せ」と歌ふを聞き、不思議があつて乳母に尋ねたが、乳母は返事しかねて涙をこぼす。それからお夏は物狂はしうなつて、「生きて思ひをさしようよりも」と、子供の中に入り香頭を取つて歌つた。遂に「向ひ通るは清十郎でないか、笠がよく似た菅笠がやはんはは」と、けら／＼笑つて歩いてゐた。

お夏はいつも清十郎の塚に水を手向けて菩提を弔つた。後に人々の勧めに従ひ、正覺寺に入つて尼となつた。但馬屋の主人も發心を起し、車長持から出た七百兩で佛事供養を營み、清十郎の冥福を祈つた。

これに據ると、清十郎が處刑されたのは萬治三年四月十八日で、其の時清十郎は二十五歳、お夏は十六歳である。

### 影 響

お夏・清十郎の哀話は、西鶴・近松の二大文豪の筆に描寫されたので有名となつた。そして雲の上までも聞えて、靈元上皇は、「清十郎きけ夏が來て鳴く時鳥」と御吟あそばし給うたといふ。

淨瑠璃では、改作物に「和泉國浮名溜池」並木宗助・安田蛙文作、享、「極彩色娘扇」近松半二著作、寶曆、「夏浴衣清十郎染」菅助・豊春助作、安永七年、「おなつこまふり」壽・連理の松、文政三年正月大阪、「稻荷境内座上演」などがあつた。

歌舞伎では、本曲を改題した「飾磨襦布染」正徳年間京都の柳山四郎太郎がある。又「笠物狂」都一中の節で語られ、正、「卯花二世今駕籠」富士松薩摩の語り、延、「家名所妹背笠紐」常磐津の語り、寶曆五年中村座上演、「道行比翼の菊蝶」富本の語り、天明、「亂咲縁花笠」常磐津の語り、寛政、「錦車纏裾卯の花」富本の語り、最「追戀男容」富本の語り、天保二年河原崎座上演などがあつた。坪内逍遙作「お夏狂亂」十一年中村座上演。

(明治四十一年刊。『五人女』卷一に據る)もある。

小説にも作られ、浮世草子の「亂脛三本鏡」(西澤一風作)の中にも書かれ、讀本の「常夏草紙」(曲亭馬琴作)、「縁結月下菊」(柳亭作、天保十年刊)など其の數が甚だ多い。

## 上之卷 (大阪の川口)

### 登場人物の王な者

左治右衛門(和泉國水間の里の農夫。清十郎の父。六十餘歳)

お 俊(左治右衛門の娘。清十郎の妹)

お 三(清十郎許嫁の娘)

船 頭

勘十郎(播磨國姫路本町の米問屋但馬屋の悪手代。清十郎の傍輩)

蔣繪師權之丞の手代

### 梗概

和泉國水間の里の百姓左治右衛門の子清十郎は、十一歳の時から播州姫路本町の米問屋但馬屋九左衛門に養育されて、其の手代となつた。彼は温順で正直で伶俐で美貌であつたから、主人の信頼も厚く、相手代の中で獨り光つてゐた。それが爲に主人の一人娘の美しいお夏に慕はれて、相思の仲となり、やがては傍輩等にも知られるに至つた。

正月過ぎた頃、左治右衛門は我が子清十郎の世計になつてゐる但馬屋へ、年頭の祝儀に行かうとして、娘お俊と清十郎の許嫁お三とを連れて家を出た。其の途中道頓堀の芝居を見物し、大阪の名所々々を見廻つたが、二人の娘は父にはぐれて、日の暮れ方に漸く川口に著き、船の中で待つてゐる父に呼ばれて共に乗船した。

清十郎の相手代勘十郎は、向うの船中から之を見てゐるが、彼を騙つて、主人から預かつたお夏の嫁入道具の支拂金を自分が

横領した其の後始末を附けようと工み、左治右衛門に面會を求めて其の船に乗移つた。一通りの挨拶を述べた後に勘十郎は「清十郎の傍撃の好みとして、其方の耳に入れねばならぬ事がある。彼は主人の娘お夏様と懇ろにして子を孕ませた。其のお夏様は近い中に立野の親類に祝言が極つて、嫁入道具も出来揃うたので、我らは主人の使となつて、それを請取りに此處へ来ました。さて其の道具が但馬屋に届き次第、嫁入となるのぢやが、さうなるとお夏様の腹の子に就いて詮議とならう。其の時に清十郎が手代の身分で、主人の娘を誘惑した事が露はれては、磔刑となるは固より、親兄弟も連坐する事となるであらう。それで何とかして嫁入のない先に、清十郎が身を引く思案をさせたさに知らせます」と威した。質朴な山出しの左治右衛門は、これを眞と信じて我が子の不心得を悲しみ、「どうぞ悴の命を助けて下さるやうに取計らひをお頼み申します」と、勘十郎に哀願した。

ここに於て勘十郎は、左治右衛門にお夏の嫁入道具を押へさせて、それに要する銀八貫目ばかりを彼から奪はうとした。然し左治右衛門は、銀を出す事には中々承引しない。爲に勘十郎は更に一策を按じ、彼をして蒔繪師の請負つた嫁入道具を押へさせた。然るに蒔繪師の手代は之を承知せず、左治右衛門と口論に及ぶ。勘十郎はこれを仲裁するが如く見せて、左治右衛門に嫁入道具差押の證文を書くやうに諭した。彼は其の甘言にふはと乗り、勘十郎の言ふが儘にお三に、「但馬屋のお夏祝言に付構ひ有之により、嫁入道具押へ止め申所件の如し、但馬屋勘十郎殿・蒔繪師權之丞殿、清十郎親左治右衛門」と書かせて之に捺印した。勘十郎は其の證文を受取つて懐に入れ、蒔繪師を歸した。そして如何にも清十郎に親切を盡すが如く言葉巧みに左治右衛門を欺いて、彼等の姫路に下るを止めた。

左治右衛門は勘十郎に深謝して、「嫁も娘もやれ勘十郎様を拜め」とて、くれぐれも清十郎の行末を頼んだ。これがやがて清十郎の身の破滅とならうとは、知らぬが佛の左治右衛門は有難涙にくれて、勘十郎は船、左治右衛門等は故郷へと別れた。

### 評

大阪川口の船著場の情景を目前に見るやうに描寫されてゐる。其の中に二人の娘を連れた田舎の眞正直な老爺が、悪漢に騙ら

れて證文を書き捺印するあたりは、今も往々ありがちな世相を思はせる。そして本曲の主人公お夏・清十郎は、讀者に思はせぶりに噂に出るのみで、遂に其の姿を見せぬ。誠に情味豊かな名文である。

上之卷

○通ひ車：乗せられ 深草の少將は小野小町に懇懇し、小町の口車に乗せられて、百夜通ふことを約し、其の都度、乗つて通ふ車の術に其度數を刻み、九十九夜まで通つたが、遂に望みを遂げられなかつたといふ故事に據つた。この故事は謡曲「通小町」にも出づ。「あだの情」とは眞實ならぬ情の意。  
○闇の扇：堰かれ 美濃岡野上の宿の長の内の遊女花子が吉田の少將と契つた。少將は花子と扇を取替へて東に下つた。花子は少將を慕ふ餘り、取替へた扇を眺め入つて闇から外へ出なかつたので、長が怒つて花子を放逐した。花子は遂に狂女となつて、班女と呼ばれた事が謡曲「班女」に見えてゐる。  
○この文はそれと據つた。「親骨」は、扇の親骨と親分さをいひかけ、「せかれ」は逢ふ瀬を取られる意。花子を班女という譯は、班姫好が涙の成かたを愛せられ、後に寵愛へたので、我が身を扇に喩へて、秋扇の詩を作つた故事に據つたのである。

○形見の烏帽子：言ひ被り 謡曲「松風」に、中納言在行平が松風、村雨の二女と契り、形見に烏帽子・狩衣を残し置いた。松風はその形見を眺めて戀ひわびる事を記してある。それを葉帽子は、行平が烏帽子を形見に與へたのは、二女に情が薄らいたので別れる口實にした事にいひなした。「言ひ被り」は、言ひ懸りの意と冠をいひかけた。

○柏木の鞠 「源氏物語」若菜・柏木の兩卷に、柏

通ひ車は小町があだの情に乗せられ、闇の扇は班女が親骨に堰かれ、形見の烏帽子は行平の言ひ被り、柏木の鞠山路が笛、古今其品變れ共皆これ戀路の寄せ榎、根太も根強き門柱、其但馬屋の初色に立つや浮名の濡れ草鞋、笠がよく似た菅笠の雫積りて、戀の淵、湧きて流るゝ和泉の國、水間の里の左治右衛門、鳥作りの田鳥や、鶯が生んだる高給取の手代は主の代りをも、清十郎といふ子を持つて老の入まへ暮よき、正月著物播磨濁延ながら年頭に、娘はお俊嫁の名も三人連れの木賃宿、明日は出舟の名残とて道頓堀の芝居過、名所は大坂の娘子達に交りても、打てず壓されず手入らずの、田舎生れのおぼこにも父の乗りたる便船の、印は如何に碇綱、手繰りついたぞ日は傾く、いざ急がんとちよこゝ走りとはか

木右衛門督が、光源氏の邸宅六條院で蹴鞠の遊があつた時、階の中程に休らへる折衝、唐猫の飛出たはずみに御座が閉いたので、内に坐せる女三の宮の姿があり／＼と見えた。これより柏木の君深く女三の宮を懸想して遂に情を通じた事が見えてゐる。

○山路が笛 「鳥啼折」の草子に、用明天皇が御身を驚し草刈童となつて、御名を山路といはれ、襲後に下り眞野の長者の内に牛飼となられて、長者の娘と結婚された事が記してある。この事は近松作「用明天皇輸入書」にも脚色されてゐる。山路は用明天皇の御匿名であるが、蓋し紀の齋名が暮春詠覽の賦の序に「山路日暮漸」耳者、機歌牧笛之聲」なるに據つた名であらう。

○寄せ櫃 商家などの人口の関櫃の、蓋間は取はずし、夜間は入れて戸を閉げるやうにしたもの。以て寄り合ひの意にうた。

○根本 床板を支へ承ける下の横木。「根本も根強き」は頭韻法。

○初色 初戀。お夏の初戀をさす。

○濡れ草鞋 戀を濡れたいへは、それに濡れ草鞋で働く手代の清十郎をいひかけた。

○笠が能く似た菅笠の 貞享頃に流行した唄に據つた。西鶴作「五人女」巻一に「向ひ通るは清十郎でないか、笠が能く似た菅笠が」。「向ひ通るは云々」をも見よ。

○水間の里 和泉國泉南郡木島村水間。水間には水間觀音堂があつて、其の境内に寶篋印塔がある。俗にお夏、清十郎の妻と稱し、縁結びの守護神として、

は、口にぞ著きにける、親左治右衛門苦打揚げて、やあこりや、此處じや、

はれやれ、大膽な暮れる迄、大坂の町をぶら／＼と、女の身にて何事ぞ昨夕も

東の横堀で、男と女子と喧嘩して濱納屋の下で、組んづ轉んづして居たを幾はな

か見て来た、扱になりしやら錢を突いたも慥に見た、大坂の喧嘩大方相場が極

遠近男女の信仰者が多い。西鶴作「五人女」巻一には、清十郎の父は播州室津の酒造商人和泉清左衛門となつてゐる。

○田鳥 賤しい農夫に喩へてうた。

○鶯が生んだ鷹 醜い親が美しい子を生んだことに喩へていふ諷。「色里三所世帯」江戸の巻に「さる太夫様は當年十九は花よ、それを／＼春自然の美若、麴町の鳥屋の娘さかや、鶯が鷹を生んだとはこれなるべし」。「田鳥」は鶯に縁語。

○人まへ 人前と書いてもあれども、人米（いりまい）の當字。もみ米の收人をいうた語、轉じて廣く收人の意に用ゐる。（見索引）

○播磨湯 著物張るに播磨湯をいひかけた。「この文は、晴れの衣裳を著て、播磨岡姫路但馬屋に延引ながら年頃の祝儀に社かうミの意。

○三人連れ 娘の名さんに、左治右衛門、お使さんの三人連れをいひかけた。

○木賃宿 木賃を拂はしめて旅客を泊らせる下等の旅館。

○芝居過ぎ 二の文は、芝居見物を済してから、大阪の數多の名所を見めぐむ意。

○打てず腰されず 腹せす氣懸けおじされる事なく、臆

して顔を赤くするをうてるこいふ。

○おぼこ うぶこ（産子）の轉。また世間れず、初心な小兒をいふ。無邪氣な若。

○碇綱 碇に綱の附いた繪を染出して船の旗印にしたもの。「いかに碇綱」は頭韻法。「手繰りついたぞ」も碇綱に縁語。

○とはかは口 あわて急ぐ意にいふ。「さばかはと、川口をいひかけた。

○はれやれ 「はれも」やれ／＼も感動詞。やれやれま。

○東の横堀 大阪東横堀川の沿岸。

○濱納屋 河岸にある物置屋。貞享から享保の後までも、大阪の濱納屋の邊は、辻君が夜陰に乗じ往來の人々の袖を引き、納屋の陰に隠れて淫を賣る所であつた。「この文に、男と女子と喧嘩して」とあるは、辻君が男と戯れる行爲を喧嘩と誤認したのである。以て左治右衛門が正直な全くの山翁者であつた事が知れる。

○幾はな 幾端。幾組。

○あつかひ 扱。喧嘩などの仲致。和解。

○突いた 突出した。手に錢又は骨牌（かるた）などを握つて突出すを「突く」といふ。

○十文 辻若を買つて樂しむ料金である。よつて辻若を十文色こいふ。富世娘氣質五之卷に總縁の事を記して、「往來の袖をひかへて十文づつに情なまきけ」の切實とある。

○喧嘩は降り物 喧嘩は何時どこで起るか知れぬといふ意の語。「富原傳授手習鑑」にも「見れば双方服装束、喧嘩は降り物とあつてから、爰で仕舞はつけさせぬ、出やれ」とある。

○和御料 我御料の義。親しんでいふ對稱人代名詞。お前。

○きなか 寸半。一寸の半分の義。續一文は燈一寸の定めなれば其の半即ち半纏をいふ。(見索引)  
○川口の八景 大阪川口の風景を近江八景にぞらへたものであらう。

○姫路 姫路市は播州平野にあつて、姫路城が聳立してゐる。現今は第十師團司令部・高等學校などの所在地で、山陽本線・播但線の交差点として交通の要路に當る。

○是へ見えし これへ御座つたの意で、船頭の詞。

○不思議 年も寄らぬは不思議と、不思議な處で逢ひましたをいひかけた。

○はや下つたも存ぜず もはや姫路に下つたかも知らぬ。

○貧乏隙無し 貧乏世帯は常にいそがしいとの意の語。

まつて、十文では事が濟む喧嘩は降り物（おのりもの）和御料達（わごりよたち）、若もの事があつたり共いかに九文（こ）きなかでも、堪忍（かんにん）ばし召さるな」と眞顔（まがほ）に言ひしも殊勝（しゆせう）なり、一人の娘打笑ひ（むすめうちわら）「さればいの、今日（けふ）も一日芝居（しばゐ）見てそれから此處（こゝ）の川口（かわぐち）の、八景とやら見物してつい今になりし」とて、舟（ふね）に乗れば左治右衛門草履（ぞうり）菅笠（すががさ）片附（かたつき）けて「まづ休（やす）めや」と言ふ處へ向ふの舟の船頭（せんとう）來り、和泉（わづみ）の國の左治右衛門殿（だいらゑもん）は此舟（こゝのふね）にか、此方の舟の乗手衆（のりものしゆう）がちとお目に懸（か）りたい、播州（はんしゅう）姫路（ひめち）但馬屋（たじまや）の勘十郎（かんとしろう）といへば、合點（あて）じやげな」とぞ申ける、左治右衛門聞きも敢へす「ア、知つた、但馬屋の勘十郎殿（かんとしろうだいらゑもん）わしが息子の傍輩（はなはだ）衆、參つてお目に懸（か）りませふ」と上（あ）がらんとする處（ところ）に「是へ見へし」と勘十郎（かんとしろう）「何と」と親父殿（おやぢだいらゑもん）、扱（あ）も年も寄らぬは不思議（ふしぎ）な處（ところ）で逢（あ）ひました、先御無事（まごむじ）にて一段清十郎（せいでん）も息災（そそい）で、商（あきな）ひの用事（ようじ）にて此所（このところ）へ上（あ）りしが早下（はやくだ）つたも存（ぞん）せず、且那（おりの）も折々噂（うわさ）なり何故（なぜ）に見へぬ」と言ひければ「急い勘十郎殿（かんとしろうだいらゑもん）様お久しう御座（ござ）ります、嫁（よめ）の子供（こども）が申にも親父（おやぢ）ちと旦那様（だんなさま）へ往（い）かつしやれ、何かの御禮（おれい）も申さつしやれと申まするヲ、〜とは申ながら正眞（しょうじん）の貧乏隙（ひんぱひまな）無し、物作り（ものづく）の事（こと）なればいや大根時（だいこんとき）の綿時（わたとき）の、瓜（うり）を蒔（ま）くは茄子（なすび）を作るは牛蒡烟（ごんぱはば）・豆烟（まめたけ）、粟（あは）よ黍（あまぎ）よ藍時（あいなとき）

○赤らむ 麥なごの熟するをいふ。「皇極紀元年八月の條に「九穀登熟なりあからむ」。

○何ぢやし 何といふこともなく。「しは語氣を強める助詞。

○留守をもさせん 清十郎の妻として家をやらせよう。

○逆もの事に いつその事に。

○笑止 こまることの態。(見索引)

○茶壺を抱いた様 子を孕んで腹のふくれてゐるを形容したもの。諺に「腰に茶壺」もいふ。

○立野 播磨國細野町をいひ、備保川(いぼがほ)の沿岸にある。初めは立野と記し、後に龍野と改まつた。現今は人口約七千、醬油・茶麴の産地である。

○片假名の木の空 礫りに處せられることをいふ。片假名の「キ」はその形が礫柱に似てゐるので斯くいふた。礫柱は長さ二間、五寸角で、上下二ヶ所に横木がある。

○りちぎ 律儀。律儀。眞面目。正直。(見索引)

○火屋 火番場。茶屋所。

よ、麥を蒔くぞ赤らむぞ田を植へては草を取る、穂が出れば刈りまする初になれば磨りまする、米になれば炊きまする飯になれば食へまする、何じやし只居る間とてなく御無沙汰」とこそ語りけれ、勘十郎打領き「尤々何方も隙はなし、して此舟に乗て何方への下りぞ」と言へば「先旦那へ春の御禮も申清十郎にも逢はんと存じ、是は妹お俊あれは行くく清十郎が留守をもさせんと存じお三と申娘分、連れて姫路へ罷下る、逆の事に御同道致さん」と言ければ「イヤコレ逢ひたいと言ふは其事よ先下る事はいらぬもの、清十郎が沙汰を聞かれぬか扱々氣の毒笑止な事、旦那の娘お夏様と密通して、お夏様のお腹は茶壺を抱いた様になる、それに立野の一門中へ祝言が極つて、嫁入道具も出来揃ひ身共が道具を請取て、下り次第の嫁入あの腹の土産物、聲から詮議があるは定否でも應でも清十郎は、片假名の木の空で此様に手を廣げ、引張帆は知れた事親兄弟も同罪也、どふぞ嫁入の無い先に、身を引思案がさせたさに知らせます」と威しける、親は在所の律儀者何の工みの有共知らず、「ア、お前は如来様内々どふやら承り、氣遣ひ致せし折から也傍輩の誼みとて御知らせ有難し、年六十に餘つて火屋へ片足踏込んで、一

○下心 心底。心掛。この文は、「下心の悪い」といふ言葉は多く淨瑠璃に語られる文句である。其の文句を田舎者が何處で聞いて知つたものか、斯ういふ時にいふものも心を得て、泣いて口説くのが哀れであるこの意。

○姫路の本町 この町名今も姫路市内に存す。

○難波橋 大阪の大川に架せる橋で、天神橋の西。

○八貫目 寶永六年は金一兩に銀六十目得として、銀八貫目は金百三十三兩餘に當る。

○請取つた 引受けた。請負うた。

○何ぞいの 何でもない事よ。

○あり様 われさま(我様)の説で、對稱代名詞に用ひたのである。おまへ様。貴方。

○乾鞋 鞋の邊はらわたを去つて素乾にしたもの。この文は、張附の意に引張風といひ、風を踏にきかせて乾鞋といひ、深刑に處せられ木の空に曝されて、目乾になることをいふ。

○皮か身か 皮は皮相の意、身は内心の意。うはべの親切か、或は内心から出た親切か。

○構ひ 支障。いひがかり。

人の悴が木の空で、引張風になるのが、そもや見て居られふか悴が命助かる様に、御思案頼み奉るさりとては誰に似て、下心の悪い悴め」と何處で聞てか言ふ事と泣いて口説くぞ哀れなる、時に舟場に案内して、姫路の本町但馬屋の勘十郎様のお舟は是か、難波橋の蒔繪屋誂へのお道具今宵舟に積まんと存じ、銀子請取申さん爲参りたり」とぞ言ひ入ける、「あれ親父聞てか、銀を渡せば道具が下る道具が下れば嫁入が有、嫁入があれば清十郎は引張風、何と爰が談合、身は國へ歸つて旦那へは道具屋が出来さぬ分まで濟し置く、あの道具屋の手前は親父から、百五十兩か八貫目渡してさへ置いたれば、波風立たず嫁入が延る、延さへすれば清十郎隙を取らふと走らふと、此勘十郎請取たこ、は親仁大儀ながら、八貫目何ぞいの田地賣つても子の爲じや、出したがよい」と言ひも果てぬに左右衛門きよつとして、「エ、あり様は一口に八貫目、たとへ清十郎引張風にならふが、乾鞋にならふが世が泥の海に成とても、一文も銀はないエ、此方は皮か身か合點がいかにぬ」と顔擧め立て入るを引止め、「それは親父廻り氣な、然らば銀もいらぬ思案が有、あの蒔繪屋に向ふて、此娘には構ひ有て嫁入はさせぬ、道具は其方へ預け

○銀渡したら損であらう 蒔繪屋がその家の嫁入道具を請負ひ、それを下細工へ道具屋をさすに調整させてゐるのであるから、蒔繪屋が道具屋に其の代金を支拂ふ時は、蒔繪屋が損をするであらうとの意。

○さつきから 先刻から。

○切羽鉦 切羽は、刀の鉦のつはの両面に著き、一つは柄に當り一つは柄に當る所に添へた薄く金具の稱。鉦は鑄元を固める金具である。「切羽鉦する」とは、詰閉する意。談判。以て正直一逼の堅苦しい農夫の口物を寫したのである。

○理つて置いたぞ 後日の爲、前以て事わけを申して置いたぞ。

○廻し者 問者 問譯。この文は、蒔繪師の手代が「問譯の意に廻し者」というのを、愚直な左治右衛門は、廻し物を價鼻種「ふんごし」の意にとつたのである。

○廻し 價鼻種「ふんごし」。

○力みける 力あるさまを示した。

○下り合はせ 來つて集り合はせ。近松作「國性爺合戦」第一に「公家にも武家にも難あつて、おり合ふ味方のあらざれば」。

○其方の 其方の物。

○此方の 此方の物。

○あの仁 あの人。左治右衛門をさす。

○下細工 道具屋をさす。

○身 自分。勘十郎自身をさす。

た銀渡したら損で有ふと、一言言へば濟むじやが成まいか」と言ひければ、「ハテ銀さへいらぬ事ならば、我子の爲じや申さいでは」と表の間にぞ出にける。「播磨の姫路但馬屋の嫁入道具を、請取た蒔繪屋は此方か、身共は和泉のどん百姓土ほせりでおじやれ共、但馬屋のお夏には此方には先の構ひが有、外の男を持たせぬからは嫁入道具を押へた、勘十郎殿先きから切羽鉦する通、銀渡したら御損であらふ、理つて置いたぞ」と苦り切つてぞ申ける、蒔繪師の手代冷笑ひ、「ハテサテ悪い工面な爲され様、是娘に構ひ有ならばそれは先との詰閉き、此方に構はぬ事、どうでも是は廻し者、近比悪い仕方」と言へば「ヤア、何じや廻し物、ヲ、男じやもの廻しをせいで好い物か、若い時は小相撲の一番も捻つた己じや、男に番ふ詞が有廻し掻いたか掻かぬか、來い見せふ」と相裏げ胸を叩たいて力みける、蒔繪師も聞ぬ者片肌脱げば二人の娘、船頭舟方下り合せ「先堪忍」と取附ける、勘十郎も分入て様々有め押鎮め、塗師屋殿も悪い合點道具は其方の銀は此方の、銀遣らずに此方へ請取らふと言ふにこそ、其方と我とにあの仁から一筆取つて置ならば、我も旦那の手前が立其方も下細工へ手間遣らひでも大事なし、身に任せ

○件の如し 前文に挙げた如しの意で、譯文の終りなきに用ひる。「くせんしはくたり」(行の昔便)。

○一左右 一報。昔儀。

○是に 「これにてお別れ申す」の略。

○親の情は子の爲に藥 誑。  
一杯に煎じ詰めたる水 藥の煎じ方に、

て黙つて居や是親父、何と一筆召されふか、「ハテお前の御料簡ならばどふなり共、それお三お望次第に書きや」と言へば、勘十郎立寄つて、「但馬屋のお夏祝言に付権ひ有之により、嫁入道具押へ止め申所件の如し、但馬屋勘十郎殿・蒔繪師權之丞殿 清十郎親左治右衛門」と好む通りに書きければ、親は悦び巾著あけ、墨黒々と押したりし因果の程ぞ不便成、一札巻いて勘十郎懷中に確と納め、「サア埒は明いた塗師屋殿萬事は國より一左右せん、先お歸り」と言ひければ塗師屋は船中一禮し辭儀を述べてぞ歸りける。なふ親父殿此勘十郎が好い時に居合せて、此方親子の仕合道具さへ下らねば、祝言は延引其中には清十郎、隙を取らふが走らふが氣遣ひな事はなし、勘十郎に任せられよ此舟今宵出ると聞、然らば是に」と乗移り「方々此度下つては、清十郎が爲惡しし好い時分に便せん、其時 必待入ぞや數年馴染の清十郎、悪い様には致すまじ、いづれもさらば」と言ひければ、親子の者は舟より上がり手を合せ涙を流して、「傍輩の誼みとて有難し忝し、生みの親の我らより清十郎めが命の親、嫁も娘もやれ拜め辨へもなき清十郎、弟共下人共思召て御意見なされ美しく御暇取二度在所へ來る様に、偏に頼み奉る」と敵と

水二杯を入れて一杯に煎じるなど普通にいへば、それに據つた文術であつて、水を水間の里にいひかけた。なほこの文の「煎」「毒を合はする」とも、煎薬の縁によつた文術である。

知らぬ愚かさの、親の情は子の爲に薬といへど是は又、毒を合はする左治右衛門心は律儀一杯に、煎じ詰めたる水間の里舟は、別れて下りけれ

### 中之卷 (但馬屋内)

#### 登場人物の主なる者

- お夏 (九左衛門の娘。清十郎の愛人)
- 清十郎 (九左衛門の重手代。夏の愛人。二十五歳)
- 九左衛門 (米問屋但馬屋の主。六十歳に近い)
- 源十郎 (九左衛門の悪手代。源十郎の寄親)
- 玉 (九左衛門の内手代)
- (但馬屋の水仕女)

#### 梗概

色盛りのお夏は、この人ならばと手代の清十郎を見込んで、眞實の愛を捧げた。花心あれば流水も亦情がある。清十郎もお夏を慕つて、祕密に戀をささやいてゐた。

九左衛門は、娘お夏が清十郎を思慕してゐる事は薄々氣附いてゐるが、因襲に捉はれてゐる彼は、この自由結婚を承認する心は毛頭もなかつた。其の爲にお夏は父の望む結婚を嫌ひ、「私の母は室津の遊女であつた」と包まず語り、慙と遊女風をして人々に嫌はれ、どうぞ清十郎と一處になりたいと心窺かに希つた。

然るに父はお夏に千兩の持參金を附けて、立野の親類に嫁入さす事を約束した。そして嫁入道具を大阪に誂へ、嫁入蚊屋も出来たので、其の内祝をした。お夏も其の座に出たが、物思ひに沈みながら、「あ、私や風引いたさうな」と、鼻水打ちかんで忍び涙を紛した。

かかる所へ清十郎・勘十郎が同道して戻つて来た。九左衛門は喜んで、「よい所へ戻つた。今日はお夏の嫁入蚊屋の祝をしてる所ぢや。大阪の方はどうであつた」と問ふ。清十郎「旦那が心配なされた中國米・北國米を残らず賣つて、寫替手形も濟みました。利得高は二十四五貫目」と答へ、お夏と顔を見合はせて、互に無事を喜んだ。

九左衛門は機嫌よく、「お手柄く、それでお夏の嫁入費用は其の儲で出来た。何と勘十郎、嫁入道具も出来たであらう」。勘十郎「お道具も出来し、代金も渡しましたが、故障が起つて發送を止められました」。九左衛門「それはどういふ譯ぢや」と大いに怒る。勘十郎「決してぬかつた譯ではござりませぬ。密かな處で證文をお目に懸けて、お話申したう存じます」。九左衛門顔を顰め、「さあ言譯あらば聞かう。源十郎も来て聞け」とて、勘十郎を連れて小座敷に入る。

かくて勘十郎は、左治右衛門を騙つて取つた嫁入道具差押への證文を主人に見せて、清十郎を罵つた。が其の實は、主人から預つた嫁入道具支拂銀を横領し、其の銀を以て私商ひした赤穂鹽の損銀を埋めた悪事をくろめたのであつた。

清十郎は、かかる事のあらうとは夢にも知らず、お夏が詰袖を着てゐるのを見てからかふ。お夏は振袖と詰袖と片々に仕立て分けてゐるのを見せて、清十郎が慕ふ眞情を語る。清十郎は嬉し泣きに泣き崩れ、「申しお夏様、いづぞや借りました七十兩は、私が使ふ金でなく、勘十郎が自分商ひに損をして、平に頼むと申したので、取替へてやらうと存じましたが、彼が道すがらの話に、思ひ寄りぬ儲をして損を埋めたと申しました。それでお借りした金は不用となりましたからお返しします」と語る。お夏「その金は祖母様から戴いたもの。返さずともよいわの」とて、清十郎を誘うて切な密會を遂げる。

折節、源十郎はお夏を呼びに来てこの有様を見、直ちに勘十郎に知らせる。ここに於て親も手代等も走り出て、お夏・清十郎

を押取巻く。九左衛門は勘十郎の言を信じ、清十郎の親がお夏の結婚を妨害したと誤解してゐる折からなので、激怒してお夏の不行跡を責め、清十郎を罵り、在所の親がお夏の嫁入道具に邪魔を入れた證文を見せる。

清十郎は驚き、「誠に親の印判妹の手跡と申しながら、私は親里へ長い間歸りませぬば、夢にも覚えはござりませぬ。在所の親を呼寄せて吟味もなさらず、片方のみを聞いてお責めになるは残念に存じます。やい勘十郎め何處に居る。おのれ言はせねば堪忍せぬ」ともがけども、九左衛門は更に聽入れず、「彼が此の家に奉公に來た時の布子に著換へさせ、衣服諸道具を押へ置いて追拂へ」と喚く。そこで下部どもは清十郎を捕へて衣服を剥ぎ、弊れ布子を著せる。お夏は始終涙にくれて父を恨む。

勘十郎は清十郎の入れ物の錠前を叩き割り、包の小判七十兩を見附け、「この金はお夏様が祖母様から貰はれた、それを持つてゐる大盗人め」とて、手足を取つて引出す。清十郎は涙にくれて、もう一度旦那を拜まうと駆入るを、男共大勢寄つて大道へ追出し、門口をはたと閉めた。

頃は二月中旬、残んの雪を吹き渡る寒風の、身にしむ臘夜の道端に、清十郎は震へながら佇む。お夏は愛人の後を尋ねて、そつと門外に抜け出る。そして互に姿を認めて走り寄り、相抱擁して泣く。

お夏は「共に通れて、どんな遠國小借屋でも一處に暮しませう」と慕つた。けれども溫和な清十郎は、結婚前の主人の大切な娘を連れ去るに忍びず、懇ろに諭して慰めた。お夏は領いてこれを聽き、暫しの別れの形見にとて、清十郎と片袖づつを脱ぎ交はして身に附け、互に泣き入つた。

腰元・下女らは、「お夏様が見えぬ」とて走り出で、暗闇の中に清十郎をお夏と誤つて引入れ、門の戸をはたと鎖す。ややあつて又下女が戸を明けて出で、お夏を清十郎と思つて慕ひ寄る。お夏は清十郎の振をなし、其の下女の後々に附いて家に入る。

夜は次第に更ける。源十郎は勘十郎の眠れるを揺り起し、小聲で「其方の頼んだ鹽商ひの損銀をあゝの嫁入道具の銀で濟まし、請取手形も殘金も一處に送つたが、届いたか」と問ふ。勘十郎「オ、有難い、慥に受取つた。が其の請取證を大事にかけ、笠の

頂きに入れて、道頓堀の芝居の木戸に預けた。ところが人の笠と換はり、調べても知れなのだが、何でもない事ぢや。源十郎「それはうまく行つた。さて清十郎めの諸道具、七十兩の小判まで旦那が私に預けられた。お夏さまと清十郎とが盗み出した事にして、奪ふ思案はあるまいか」。勘十郎「どうしても蒔繪屋には拂はねばならぬ金、それをもつて濟まされる」と、互に悪玉に思案を凝らす。

清十郎は笠の中に隠れ、耳をそばだてて之を聞き、最早堪忍ならぬと臍を固め、彼等の寐靜まるを待つて枕許に近寄り、勘十郎と思ひ込んで恨の刃一閃、源十郎を刺殺し、夜著を被せて其の死骸を隠した。

奥からお夏が手燭を乗つて表へ出る。清十郎は小聲を掛けて呼止め、仔細を語り、「この上は一處に退きませう」といふ所へ、勘十郎が行燈を提げて来る。清十郎は其の姿をちらりと見、これは誤つて源十郎を殺したと驚き、そつと戸外に逃げ去る。お夏はおびえて蚊屋を被り身を隠す。勘十郎は夜著を引上げて、「ヤア源十郎が殺された」と叫ぶ。其の聲に屋内の者皆起き出て大騒ぎとなる。

お夏は窃かに清十郎の跡を慕つて表に逃げ出たが、四邊寂として人影は見えなかつた。彼の女は愛人を尋ねて西の辻に駈り東の辻に走り、「なう我が夫我が夫」と、聲を限りに呼んだ。けれども何の答もなかつた。さては倅にされたかと思ひ詰め、悲痛絶望の餘り逆上して心も亂れ、「あれお夏〜と呼ぶわいのおう〜、其處にか何處にぞ、いや〜いや待て暫し、あれは我が屋に父の聲、我を尋ねて我を呼ぶ、親もゆかしや夫も戀ひしや」と狂ひ廻る。折から曉を告げる寺の鐘や鶏の聲が、靜寂の空気をゆすつて聞えて来る。

## 評

妙齡なお夏は、清十郎が立派な人物であるを見込み、我が夫として持つべき者はこの人と思ひ、彼に對して戀の情熱に燃えた。それは誠に新しい女の思想として無理からぬ事である。

然し因襲に捉はれた父は、暗にこれを知りながら娘の心に同意せずして、己が縁者の内に嫁入させようとした。其の上に悪手代の奸策によつて、兩人の戀愛は全く破壊された。剩へ父子恩愛の情も傷けられたのであつた。其の爲にお夏は絶望して悲歎にくれ、「親もゆかしや夫も戀ひしや」と、沈痛な叫びを上げて遂に狂女となる。恰も開き初めた花が暴風に吹折られたやうに、傷ましい姿となつて凋落してしまつた。

本巻は大劇詩人巢林子が、この美しい兩人の戀が見る／＼破れて行く哀話の経路を總説して、痛恨の涙を濺いだ名文である。

### 中之卷

- 月雪や：算盤 月雪・花・紅葉の四時の風景を眺めるにも、まづ利得を念頭に置き、算盤をはじいて懸かる。
- 濡れ 男女の情事。戀。(見索引)
- 菩提心 世間の俗事をいやがる心。厭世氣。無常氣。
- 氣の前 心はへ。蒲十郎に戀する心中立てと氣がなする恋を合はせていうた。
- 飾磨の陸路播磨湯 親の顔までも繋むを飾磨にいひかけた。播磨國飾磨郡から湯「かちん」といふ染物(飾磨染)を産出するによつて、飾磨の湯「かちん」を陸路「かちん」にいひかけ、湯染を張るに播磨湯をいひかけた。諸曲「能野」に「おりの衣播磨 湯飾磨の能歩路「かちん」湯水「きよみづ」の」。
- 蚊帳の祝儀 嫁入敷屋を新調したので、其の内親に酒肴さかもりをするこゝ。
- 巾 幅。布帛の幅を數へるに用ひる接尾語。普通幅尺八九寸乃至一尺を一幅とする。「俵訓栞」に「の日本紀に幅をよめり、絹布の度(のり)也」。

所さへ、戀知り顔に姫路とは、いつ名附しぞ但馬屋のお夏が父は九左衛門、國一番の米問屋有銀箱も十づゝに、六十近き月・雪や花も紅葉も算盤に、懸かる親には似ぬ娘お夏は深き濡れ故に、菩提心と意地張りて嫁入も背も延び／＼の、それも戀する氣の前か二人の親の顔までも飾磨の陸路播磨湯國に浮名や立ぬらん、今日は蚊帳の祝儀として蒲黄の生絹六疋七疋、屋の内祝ひ賑はへ共お夏は更に氣に染まぬ、心の内の涙の蚊屋色香を外に洩さじと、ア、己や風引いたそふな」とて、

- 染まぬ こもらぬ。感ぜぬ。
- 絹 麻絲もて目を粗く紡つた布。これにお夏の心の内の、も

がりもつれる意圖々の情をいひかけた。

○しげらしやんしたらば 夫婦の交はりをなさいましたらば。「しゆる」は男女枕を交はすをいふ。

○けなりかる 羨ましからう。「けなりい」は「けなるい」ともいひ、「氣の悪わるい」の轉訛した語。心にくだい義。以て羨ましい意にいひ、現今でも備中國小田郡あたりでも用ひてゐる。この文は、蚊の餅搗きといふ詞もあるが、いかな藪蚊も羨ましからうとの意。

○紙帳 紙で作つた蚊帳。

○など 何として。さうして。

○生絹の衣 素絹、そけんしの衣をいひ、僧服である。

○及ばしな 「及ばじな」とあるべき所。この文は、お夏が戀の爲に、百千に肝膽を砕ける胸づもりは、如何な算術の達人も及ぶ事はできないなあゝの意。

○病になされた 氣に煩はれた。胸を痛められた。

○中國・北國 中國米・北國米。

○この所、清十郎が商業に於ても立派な人物たるを示す。お夏に慕はれるも無理もない。

○爲替手形 爲替證書をいふ。爲替證書には受取人名宛の支拂約束か、或は支拂委託の文言が記載してある。爲替金額の支拂は、其の證書を引替に行はれるのである。

○利合 利得。「西鶴續留卷一、古帳よりは十八人口の條に、一年の賣物七貫にたらず、此利あい

酒打ちかみて紛らかす忍び涙ぞ道理なる 心を知らぬ腰元共「お夏さまと聲さま

と、此蚊屋でしげらしやんしたらば如何な藪蚊もけなりかろ、此方は蚊屋は及び

もないせめて嫁入の紙帳なりと、あやかりたい」と口々に「申お夏さま、新し蚊

屋の御祝儀少浮き」となされませ、賑やかに酒盛して歌ひませふ」と言ひけれ

ば、「ア、何をざはくしやるぞい、蚊屋が出来よふが紙帳が出来よふが此氣合で

今やなど、嫁入する氣は微塵もないあつたら手間であの蚊屋を、生絹の衣にして

著たい只無常氣でおかしうない」と、後を見れば父親は内手代の源十郎に、帳を

讀ませて算盤の「つぶく言やんな喧ましい、先來て祝や」と赤飯の佈い目付は

我戀を、知つてそふなと百千に、碎き割りたる胸算はいかな算者も及ばしな、か

かる所へ清十郎・勘十郎同道してそ戻りける、九左衛門悦び「ヤア好い所へ戻つ

たは、今日はお夏が嫁入蚊屋の祝ひ、此拍子ならば大坂の仕合も好かる」と言へ

ば、清十郎庭に立ながら、「旦那の病になされた、中國・北國殘らず賣つて爲替手

形済みました、利合は高で貳拾四五貫目」と目を合する二人が中、無事な顔見て

嬉しいと心に心を言はせたり、九左衛門上機嫌、「お手柄くお夏が嫁入は只出

て上下六人口を建てし。

○貳拾四五貫目 金一兩に銀六十匁替りして、銀二十四貫目は金四百兩に當る。

○不落居 落著せぬこと。

○氣色 氣分の面色にあらはれること。義。氣分の悪いこと。

○脇まで詰め 振袖を短くして脇詰めにならぬ。振袖は娘の著物、脇詰めは年増女又は人妻の著物。

○洗足 旅から戻つたばかりであるから、足の上を洗はうとの意。前文に「清十郎庭に立ちながら」とある。

○沓脱 沓脱者。縁側から庭などに下りる所に据ふた石。

○ねすり言 いやみ。あてこすり。「格調茶ねすりのころもの條に、高陽院歌合に旅人のねすりのころもによめるを、判者疑をいはず勝たせたるは覺束なしとぞ、ねすり言といふも是より出たるにや」。

來た、扱何と勘十郎、蒔繪道具も出來つらん、跡から來るか如何ぞ」と言へば、  
 「お道具も出來致し、代銀残らず渡し、職人の手前は濟みながら不落居な事にて、  
 道具を止められ下りませぬ」と、言ひも果てぬに九左衛門立腹し、「それはどふじ  
 や餘る程銀は遣る、但馬屋九左衛門が娘の嫁入道具止められふ覺へはない、惣じ  
 て此祝言お夏が氣色に、日限延び、漸う此度脇まで詰め今日明日となつて、道具  
 が出來ぬ何のとして此嫁入が延ばされよか、世間からは道具屋へ銀渡さぬと評判せ  
 ん、それにかゝ銀渡し素手で戻るといふ様な、子供違つたも同然」と、算盤  
 の割れる程疊を叩いて叱りける、勘十郎迷惑そふに「御立腹御尤、拙者もぬかり  
 は致しませぬ證文をお目にかけ、密かな所でお物語致したい事御座る」と言へば、  
 「ヲ、言譯あらばサア聞こふ源十郎も來て聞け勘十郎、此方へ來い」と、打連れ  
 裏の小座敷へ苦い顔して入にけり、清十郎奥を見て「ハア、餘所には嫁入が有そ  
 ふな、此方や洗足でも致しませふ、やあるい」と沓脱に、腰を掛ければお夏つか  
 つか走り出、又ねすり言ばつかり、同じ口で可愛やと言ふ事がならぬか、意地の  
 悪い」と抱きつゝ戀には、涙脆いぞや、清十郎は懐手「ア、思へばあほうな者、

○身の正直な…まん誠に 我が身の正直な爲に、他人も同じやうに正直なもの、身勝手な考へ方をして、他人(お夏をさす)の詞を深く信じたもの意の「まん誠」は「眞誠」である。

○心中 眞實な心。

○是に懲りよどうさい坊 播磨(はいぼう)に打たれて懲りよの義。懲りよの意にいふ語。「うは」は「どう山伏」「どう拙撲」などの「どう」と同じもので、語氣を強める時に冠する語。播磨は木又は鐵で作った棒で、棒を坊に通はした擬人名であらう。地方によつては「これに懲りよ嘲賣坊」といふ。

○富士と一里塚 不確かな噂にいふ語。一里塚とは、昔時街道に一里毎に土を盛り、其の上には樹木を栽きて里程の目標としたもの。詳しくは「近松物語」を見よ。

○實事 芝居の語、立役を勧める俳優のしぐさにいひ、眞實の態を演ずること。

○挨拶 男女の情交をいふ。詳しくは「近松物語」を見よ。この文は、兩人の仲は、互に愛しあつた眞實の情交であつて、武ひがかりをつけて口舌などする間柄ではないとの意。

○室 播磨國攝津郡室津。往時は四國九州中國の諸侯が江戸往來の船舶の繫泊港として榮え、遊女なども多かつたが、今はさびれてゐる。好色由来編「卷五」に此所(室)をかし里小野町といふを見るに、伏見の泥町に少しまさりて、天神二十八夜、かこひ十七夜、値段にあはせては、さりとほみにくし。

○人は隠せど 人は、其の母の身分が賤い時は、

身の正直な勝手して人の詞をまん誠に、世間の奉公する者はわざ／＼隙を貰ふては、春は親に逢ひに行此清十郎は親里の近所に、十日廿日逗留しても、親の所に許嫁の女房分が有故に、これに逢ふと思はれては心中が立ぬと思ひ、親へ便りもせずには歸る是に懲りよどうさい坊、ほんに孫子に傳へても、主の娘と念比など駿河の富士と一里塚、及ばぬ事をエ、あほうな」と舌打ち、してぞ頭掉る、お夏涙を押拭ひ、「其方とわが身は實事にて、口舌などする挨拶か此度の祝言を、すき好んだる事でもなし知つての通り母さまは、室の女郎今の内の母さまに、あの弟が出来る迄は我も室で育ちし故、母方が悪いの傾城風が有のとて、何處の嫁にも嫌はるゝ是ぞ好いこと幸と、猶女郎の風を似せ人は隠せど我は只、母さまは傾城と一季半季の者にまで、觸れ廻りたる村時雨縁には附かじと願ひしに、あの立野のおほうづら敷銀に目が昏れて、嫁に取らふといやらしい此お夏ばつかりは、言ふた事を違へるか恨みも辛みも後を見て言ふたが好い、惣じて其方もこんな時、どふなされ斯ふなされの主あしらひが聞へぬ、私から詞を直しませふ、なふ此方の人此方向かんせ」と、袖口から手を入れて、ほと／＼叩いて抱きしむる、清十郎あ

これを隠せむ。

○一季・半季の者 一年又は半年に出掛りする奉公人。

○觸れ廻り・縁 觸れ廻るに、當時雨の降りぬぐるをいひかけ、「一村雨の雨宿りも他生の縁の縁に寄せて、縁にひつづけた。

○あはらうづら はか。痴人。「づら」は面で「はか」を「はかづら」ともいふ。「あはらう」は、阿傍羅刹(梵語Avakrasas)といふ獄卒から起つた語であらう。

○敷銀 持参銀。後文に「千兩つける」とある。

○袖下 振袖を短く脇詰にせるをさす。前文に「此度脇まで詰め」とあるに應じる。

○前髪 往時男子十二三歳になれば、前髪を立てて髪を結うた。これを若衆髪といひ、若衆髪を結へる者を若衆といふ。若衆の兄分を念者といふ。この文は、美少年が若衆髪を結ふには其の念者の同意を得べく、娘が脇詰を著るには、其の娘に關係せる男の同意を得べきであるのに、自分がそれを知らずには男としての面目が立つものかとの意。

○お針 履はれて裁縫をする女。

○片ちぐ 對なるべき物の不揃なこも。ちぐはぐ。

◇このあたり、お夏の熱烈な戀を描寫した、情味豊かな名文である。

○二人前 片袖は振の娘、片袖は詰の年増女、一人して二人前。

たりを見廻し「コレお前に聞へぬ事がある、此袖下は何事ぞ、若衆の前髪女の脇詰男が知らいで立つ物か、出来ぬ仕方」と言ひければ「なふ、そこらを忘れるお夏でなし、ま一度振袖見せたさに皆々お針が縫ふたれど、祝ふて我も縫はんとて片袖ばかり縫ふ顔して、是が嘘か」と帯解いて上著を脱げば右左、振と詰との片ちぐに片枝は蓄み片枝は、開き初めたる花衣、二人前見る誰も皆斯くぞ仕立て著せまほし、清十郎は身を擲ち手を合せ、「涙が翻れて忝し、それ程に此男を不便に思召るゝかや、冥加に盡きん物體なや」と取附 拜めば手にすがり、「女房を拜む事かいの、是程思ひ合ふた中、何故に女夫になれぬ」と辛氣、泣にぞ泣居たる、

「ヤア申お夏さま、いづぞやお前に借りました七十兩の小判の事、私が使ふ金にてなし傍輩の勘十郎、私商ひに損をして平に頼むと申た故、取換へやらんと存せしが思ひも寄らぬ仕合して、損を埋めしと道すがらの咄、もふ入らぬ金子なれば戻しませふ」と言ひければ「ア、よいはいの祖母さまの譲りの金、如何しても

○辛氣泣 悶え泣き。

○私商ひ 主人に内證で商賣すること。西鶴作「日本永代蔵」卷一、浪風靜かに袖通丸の條に「自分商ひじぶんあきなひ」とある。

るのも同意の語である。(序に云、私商ひの損銀は百二十一兩であることが後文に見ゆ。)  
◇この所、清十郎が友情に厚きを示す。

○開眼 慧眼を開く義。佛像・梵鐘などを調整して、これを奉事しようとする時に、高僧を招いて安置の式を行ふ。之を開眼供養または開眼といふ。轉じて新調の器物などの使ひ始めをいふ。

◇前文に「生絹の衣にして著たい具無常氣下をかしうない」といひ、「ここに又開眼」といふ。お夏清十郎の悲劇を暗示する用意の筆である。

○蚊屋はお夏：釣手 蚊屋は夏に吊るものなれば、夏をお夏にいひかけて「縁深く」といひ、縁結びの神に、釣手を結ぶをいひかけた。

○商ひ冥利 商人の自誓の詞。商人の我が申すことが違つたなら、神佛の冥利に盡きますと、神佛の加護を願つて誓ふ詞。この冥利又は冥加を、其の人の身分又は職業の下に附けて、領域冥加、侍冥利、番屋冥利などと言つて、其の人の自誓の詞に用ひたものである。

○舌も引入れず 言ひやまぬ中に、言ひ終つて時のために強めていふ。

○寄親 奉公人の身元引受人。「縁調衆」に、「よりおや」寄親の義、寄は寄寓の訓、親は親方の如し、事文類聚の擧主なりといへり、よりこも寄子にて、よりおやの對稱也。

○五體 全身の意。(見索引)

○小脇引出し 腕直取つて引出し。

大事ない人の來ぬ間にあの蚊屋の、開眼をせまいか」と怖々振ふ春風も、人目を忍ぶ縁の蚊屋「蚊屋はお夏に縁深く神の結ぶの釣手か」と、戯れ交はず手枕も心忙しき契りなり、内手代の源十郎「お夏さま、旦那の呼ばつしやる」と出けるが、はつと廣げし手も打たれず、呆れて立てば清十郎・お夏が襖を引被く、お夏騒がす袖にて隠し「是源十郎、其方も男じや引かせはせぬ、忍んで逢ふは清十郎見遁しにして給もらふか、沙汰をするならすると言や、幸刃物も爰に在、直に二人が死ぬるまでサア助けて給もるか殺しやるか、さつとした誓文で承らふ」と弱みを見せず、責付られて源十郎「沙汰して私得もなし商ひ冥利隠密なり、偽ならば各より私が先さきに、清十郎が脇指にて止めを刺さるゝ法もあれ」と、言ひ捨て歸る其舌も引入れず寄親の、勘十郎に打明けて斯くと語りし不實さよ、二人は五體に冷汗の露の命も消ゆるばかり、居直つて溜息をつきも敢へぬに親手代、ばらばらと走り出お夏が小脇引出し、清十郎も這ひ出れば「其まゝ居れ身動させば、男共撲ちのめらせ」と取廻せば、蚊帳の内にすこゝと晝の螢の影消て、籠に窺る其風情外にお夏は夏の蟬、聲の限りを泣き盡し思ひを比ぶるばかりなり 親は

○女郎 「めわらはと女童」の轉語。女を卑しめていふ。

○流れの者 遊女。(見索引)

○たまか 手細の義。こまかに心を用ひることをめめやか。度留。

○こうたら 公道である。じみ。著實。(見索引)

○袖下 お夏の片方の振袖をさしていふ。

○口の明かれぬ事 辯明のできぬ事。

◇この所は、上之番の終りの所に、番を合はする左治右衛門とあるに應じた筆である。

○請狀 請人に立つ證書。引緒の證文。

○あらがふ 争ひ合ふ。抗争する。

○片手打 片手落ちに同じ。偏頗。

○胡亂 亂りがはしきこと。義、轉じて、盛しく疑はしいこと。意にいふ。支那では「胡亂」をHutanを發音して用ひ、「胡亂亂道」「胡亂亂進」などを分けても用ひてゐる。「亂」の客家音の口である。思ふに往昔本邦人が廣東地方に渡航してゐた際傳へた語が廣まつたのであらう。

腹立ち涙にて、やれ女郎め、己れが母は流れの者、空言に身はまぶれても、心のたまかさこうたうさ千人にも稀なりしぞ、いつ習ふて其淫奔遊女の腹とて何方へも、嫁に嫌ふは聞つらん、其袖下は何事ぞ、左様な事をせんよりも己れが額に傾城の娘と、何故看板は打居らぬ」と齒切りを、してぞ泣けるが、やい丁稚め不義一通りは赦しもあり、十一の年から子同然に育てし奴、事によらばお夏めと一つにせまい物でもなし、在所の親めと言ひ合せ嫁入道具に邪魔を入、親方に恥か、せ但馬屋の家を覆そふと工んだな、口の明かれぬ事見せん」と證文出して「是見たか、己れが請狀にある親めが印判、妹とやら嫁とやらが文共合せて吟味した、芥子程も違ひなし覺へが有らふあらがふな、主の寝首を掻かんも知らずエ、憎や」と蚊屋越しに、額を三つ四つ喰はせて涙を、翻して怒りける、清十郎はつと驚き、「親の印判妹の手跡とは言ひながら、親にさへ逢はぬ身が夢程も覺へなし、在所の親を召寄せて吟味もなされず、片手打のなされ様勘十郎め何處に居る、言はせねば堪忍せぬ」と蚊屋より出るを取つて押へ「ヤレ勘十郎・源十郎は此九左衛門が兩の眼の代りをする、其手代が詮索して一札取つたに胡亂があるか、隙をくれた

○這出 始めて田舎から這出て奉公に來た時、山出し。

○うせた 來た。(見索引)

○布子 婦人の綿服。

○引剝いで 今著てる衣服を引剝いで。

○無得心 關慾、不人情の意。近松作「源氏冷泉節」下之卷に「わが料を弟子に遣る無得心や候べき」。

○千兩つける 持參金を千兩附ける。

○胸慾 食欲の轉、非道、不人情。

○うぞぶるひ うそぶるひ(薄顔)の「そ」が、其の下の濁音「ぶ」にひかれて濁つた語。近松作「殺油地獄」上巻に「花草も下女もうるたへ、小菊を圍うてうぞぶるひ」。

○半櫃 衣類などを入れる小櫃をいひ、鏡前が附いてゐる。

○三途川の褌衣袋 三途川は野原河または三瀬川みつせがはしともいふ。蓋し三惡道を河に墮へ、以て冥土にある河としたのである。人死して冥土に墮き、三途川を渡る時に、其の川のほとりに褌衣袋

出て失せふ、こりや女子共男共、彼奴が這出に著てうせた布子があらふ尋出し、引剝いで著せ換へ追出せ」とぞ喚きける、お夏はかゝる有様を目も當てられず涙にくれ、「言はゞ我身も遁れぬ科、餘りこいへば親ながら、無得心なるお心や人の識りも思召し、少は有免あれかし」と聲を、あげてぞ泣居たる、「フ、むごいも辛いも知つたれ共、己れが母が遺言に傾城の娘とて、侮られふか淺ましや、未來の障りは是のみと返すゝも歎きしに、氣遣するな好い婿取つて、名を揚げさせふと請合しを嬉しそふに打笑ひ、それで成佛々々とて死んだ顔容忘れかね、千兩つける嫁入を止め大事の娘を唆し、惑ひ者になしたる恨み但馬屋の九左衛門は、胸慾者酷い者と言はれねば亡き人の、位牌に向ふて言譯ない胸慾者には誰がなせし」と、わつとばかりに堪へかね咽返りてぞ歎かる、其間に下部共衣裳を剝いで振袖の、汚れし綿衣に著せ換ゆればさしも美形の清十郎、山田の案山子とうぞぶるひ二目と見られぬ容姿、お夏は「我も一處に」と飛附を下女腰元、引分け有め教訓し常の部屋にぞ伴ひける、父は彌腹を立「勘十郎はいづくに有、何に恐れ引込むぞ清十郎めが入物吟味し、衣類諸道具押へ置、追出せ」と言ひ付、

さいふ鬼がある、亡者の衣を一枚奉ふといふ。「佛説地藏菩薩發心因緣第十卷」に「碧頭河曲に於初江邊、官廳相連承所渡、前大河即是碧頭、見渡之人、名奈河津、所渡有三、一山水灘、二江深淵、三有橋渡、官前有「大橋」、名「衣領橋」、陸往二鬼、「一名奉衣裳」、「二名懸衣翁」。

○提物 印籠、巾着、煙草人の類。

○差換 差換の脇差。

○赤穂鹽 播磨國赤穂は古來鹽の名産地で、この地より産出する食鹽を赤穂鹽といふ。「和漢三才圖會」播磨國土産の條に、「鹽、赤穂。赤穂の鹽出は、正保二年藩主淺野長直が開拓したもので、現今も一年の製鹽萬四、三〇〇萬石に及んでゐる。

○相讀 算用する時に念高の讀み合せをする者をいふ。以て相共に應じて證人に立つ者の意にいふ。

○非人 乞食。(見索引)

○紗綾 葡萄牙語 Seta。(西班牙語の seda)、布帛の義。巾の形を、つして連ねた模様や、其の他種々の模様を現はした純地(ぬめぎ)の絹織物。

○いろは：知らぬ者 平假名をも知らぬ無學文盲の者の意。これに「花」の縁で、「いろは」につづけ、取られるにひかけた。

○算勘 算盤の勘定。

○海より山よりも勝つたる 硯の海に、海よりも深く、山よりも高い意をいひかけて續けた。

奥に入れれば「心得ました」と勘十郎、半櫃・算筒昇き出させぐはらりと打明  
て、衣類引出し取散らすは、三途川の奪衣婆の呵責も斯くやと哀れなり、錠前を  
叩き破り提物・差換取出せば、包の小判七拾兩「是は扱、此金子はお夏さまへ祖母  
御よりの譲りの金、身が包ませて覺へ有極つた大盗人、首の有は旦那の慈悲、叩  
き出して追拂へ」と手足を取て引出す、清十郎大聲あげ、「ヤイ勘十郎盗人する男  
でなし、汝が私商ひに赤穂鹽買ふて損をして、首括らねばならぬ首尾どぶぞと  
談合したる故、お夏さまへ申て汝に貸す爲預つた、戀する者の因果で傍輩の機嫌  
取、追従したが身の仇となつたるか口惜しや、汝が損は入れ合せ、今は金も入ら  
ぬといふ、察するに此度の嫁入道具の代銀を、遣らずに汝が引込んで我親騙つて  
一札させ、人を損なふ工面とは鏡にかけて知つたれ共、相讀なければ是非もなし、  
是を見よ清十郎は破れ布子一枚で、非人の體にはなつたれ共心の内は紗綾縮緬、  
錦より潔いエ、辛いぞやれ恨めしい」と、齒嚙みをなして泣きけるが「旦那に  
さら〜恨みはなし、十一歳の彌生の花いろはともちりぬるとも、知らぬ者の是  
程迄、算勘商ひ讀書きの、硯の海より山よりも、勝つたる御厚恩拳一つ當らぬ身

○如月 陰曆二月の稱。

○涅槃の雪の名残 雪は涅槃會(陰曆二月十五日)の頃から融けなくなるさいふ薩による。「毛吹草」に雪の果は涅槃」。近松作「傾城吉園染」に涅槃の名残の雪。

○無慚 罪を作りて心に慚ざる所なき義。轉じて不便ふびんの意にいふ。

○布子の袖 清十郎の綿入れの總麻の袖。前文に「袖口から手を入れて、ほと／＼叩いて捲きしむる」といふ縁によつた。

○身は脱殻 前文に「お夏は夏の蟬」といへる縁によつた。

○清水さま 攝丹播三國の境(播丹縣邊比延驛から東約八村)にある御岳山清水寺をいひ、西國順禮第二十五番の札所。

○京の清水 京都市東山區松原通清水寺をいふ。法相宗の中本山で、昔羽山と號し、奈良の興福寺に屬してゐる。千手觀世音を奉祀し、西國順禮第十六番の札所。

○室の明神 播磨國攝保郡室津港にあつて、今は廢社である。

○書寫山 姫路驛の西北約二軒、書寫山の頂上にある圓教寺(天台宗)をいひ、西國順禮第二十七番の札所。

○身の垢抜いて 我が身の冤罪をすすいで。

○溫和は清十郎は戀に對しても柔直であつた。

が、いか成月日か今日の今日主従の縁切る、いか成神の咎めぞや、今一度旦那の顔拜まん」と駈入るを、情なくも男共手取足取大道へ追出し、門口はたと鎖しけるは詮方、もなき 次第なり

まだ如月の、朧夜や涅槃の雪の名残の風、立止まりつ立去りつ凍へ狼狽へ佇めり、無慚やお夏は魂も、布子の袖に入ばかり身は脱殻の力も切れ、もしやと部屋を忍び出門の戸明けてそつと出、四邊を見れば人影の「お夏さまか」「爰にか」と、言ふより先に抱き合ひ聲を立てじと諸共に、肩の縫目に食ひ附て忍び、音に泣くばかりなり、今の間の物思ひま一度逢はせ下されと、いくらの願を掛けたやら清十郎の清の字なれば、先此所の清水さま、京の清水・室の明神、書寫山・伊勢の御神さま、住吉さま、金毘羅さま、不動・愛染・大師さま、拜み頼みし験にて、顔を見て有難やサア二人づれにて立退きて、いか成遠國小借屋でも二人使ふを一人使ひ、一人使ふを手鍋でも暮されまい物でもなし、いざ立返かん」と有ければ、いやすれでは情の親方の憎しみも増るべし、在所へ歸り親共と勘十郎めが善惡糺し、身の垢抜いて詮言せば御機嫌も直るべし、それまで辛抱遊ばせ」と泣く／＼宥め慰

○氣隨きずみ きまま。わがまま。

○服紗かみさ 柔かい絹物。「俚言雑覽」ふくさの條に「今柔懐の絹類をフクサモノと云も同じ」。

○萬の涙 萬感胸にせまる涙。

◇女の生命とする純真の戀に破れ、絶望に泣くお夏の様子を描寫して哀れを極める。

○あこがる 在處難るの義。魂身にそはず。

○みづし 御厨子所の女。事務所をはたらく下女。水仕と書くは當字。

○袖になし 粗略になし。「身になし」の反對。

○神ぞ「神を照覽ある」の略されたもので、即ち儼を言ふに於ては、神の照覽ましますによつて、直に神罰を蒙る法もあれとの意で、自誓の詞。

むれば、「戀しゆかしは身の氣隨男の爲には憂き苦勞、厭はずながら只一人突放し

て遣られふか、これ此小袖と脱ぎ替へて、其布子を逢ふまでの形見に著ん」と涙

ながら、互に帯解き身を合せ片袖づゝを脱ぎ交はす、肌睦まじき心ざし戀路なら

ずは何故に生まれて知らぬ、木綿物、服紗の衣と引締めて、顔と顔を見合せてわ

つと泣入る、心底に萬の涙籠るべし、物にて顔を押包み、「さらばや」と言ふ所

へ腰元・下女共、「お夏さまが御座らぬ裏よ井戸よ」と密語きしが、門口明けて「こ

りや此所にじや、ア、申お夏さま、お前は悪い合點な何方らの爲にもならぬ事、

まづ御入り」と衣裳を徴に、清十郎を取巻き連れて内に入るに、お夏續いて入

らんとす「是清十郎殿、お夏さまがいとしくは先往んだが好いはいの、男の様に

も無い人じや」と、恥ぢしめ突出し押出し、大戸をはたと鎖しければ、清十郎は

詮方なく部屋へ入體にして、大釜明けて身を縮め、そろり／＼と忍び入り中より

蓋をぞ締めつける、お夏は門にあこがれて入るべき便りを待つ處に、水仕の玉は

そろ／＼と、門口明けて「なふ清十郎さま清さま」と、お夏が袖をしかと取、ア

ア此方は戀知らず、私が此方に絆されてお主さまは袖になし、朝晩に心をつけ神

○七八十四五すつとんとんと打ちたいが「若みざり」(資永三年刊)卷五、かるやまの唄の文句に「快き夢二つ三つ、七八十四五すつとんとんと打ちむ色里」とあるに據つた。

○人は落ち目の心ざし 諺に「人は落ち目が大事」といふ。

○あも「倭訓栞」に「あも」兒女子の語に餅をいふ、甘き義なり。

○千倍 至極満足の意にいふ。

○杯せう 固めの杯を致さう。

○ひよる酔うて ひよろ／＼する程酔うて。

○鹽商ひの損銀 前文に「汝が私商ひに赤穂鹽買つて損をして」とある。(其の損銀は百二十一兩であることが後文に見ゆ)。

○彼の金子 勘十郎が主人からお夏の嫁入道具支拂金として受取つたものをいひ、其の金高は百四十兩であることが後文に見ゆ。

○過分 過分の扱ひの意。身に餘つて羨いこと。

ぞ思を盡せども、お夏さまに心中たて一度も靡いて下されぬ、恨みの焰、火吹き竹、七や十四五すつとんとんと打ちたいが、ア、いとしいが因果の種人は落ち目の心ざし、コレ此餅は正月の、在所へ遣らふと思へ共君に何が惜しからん、恥かしながら此玉を食ふと思ふて、賞玩して下さんせ」と懐に押入る、お夏は色を知らせじとじつと抱附き締めければ、「ヲ、ぞつとする程お嬉しい恨みの雲も晴れ渡り、是で千倍々々々々とももの事に杯せふ、酒取て來ましょ」と入跡に引つ續いてつ、と入り、部屋に駈込み夜著引被き身を顛はしてぞ伏し居たる、清十郎は斯くとも知らずお夏は外にかぞと、釜の蓋明け見廻せば奥には人も寐入り端、勘十郎は親方と寢酒の相伴ひよる酔うて、夜著蒲團引出し常の所に臥しにけり、後より又源十郎これも微酔ひ來りしが、「勘十郎もふ寐たか少談合ある目を覺ませ」と、頬杖してぞ寢轉びける、「いや寐入りはせぬサア話せ」と、夜著の中より煙草盆、寝ながら行燈引寄せて顔を並べて語りける、源十郎小聲になり、「其方が頼んだ鹽商ひの損銀、彼の金子で濟まして、請取手形も餘り金も一處に上した届いたか」と言へば、「ヲ、過分々々儘に届き請取つたが、其狀も請取も大事にか

○木戸 芝居場にある見物人の出入口。芝居の橋  
「やぐら」も木戸も城の雑語。

○身共 我。

○してやる しおぼす。やつてのける。うまく  
やる。

○おぞい 怖ろしい。

○まんま うまく。

○おざか 今はおぼさかしく大坂といふ。

○鼻に手を當てしすましたり 鼻に手を  
當てて氣息をうかがひ、寐入つてゐるのを知つて、  
しめたりと思ふ意。

○身代の敵 身の上の敵。我が命の敵。

笠の頂きに入れ置、其笠を道頓堀の群集に、芝居の木戸に預けて餘所の笠と換は  
つて、詮議しても知れなんだそれは失せても大事ない、お蔭で萬事忝い」といへ  
ば、源十郎「一段々々それにつき、清十郎めが諸道具七拾兩の小判迄、且那が身  
共に預けられた、お夏女郎と清十郎が盗み出した分にして、してやる様な工面が  
なと分別すれど能はぬ智恵、其方が今度のおぞい仕様魔法でも叶ふまい、どぶぞ  
しあんは有まいか」と言へば勘十郎頷いて、「嫁入道具の代銀を此方へ使ふて損を  
埋め、まんまと間には合せしが一度は大坂へ上す銀、あれをと胸に當て、居る、  
工面を聞け」と囁き合て吸附ける、煙管の先にて行燈は消て闇とぞ成にける、清  
十郎は幸と釜の内より這ひ出る、酒に酔ひたる源十郎とろく／＼寐入る體なれば、  
勘十郎揺り起し鼻に手を當てしすましたり、七拾兩を盗み取、預り手の此奴に負  
せん物と分別し、そつと起き出源十郎を我寢所に押遣つて、夜著打被ぶせ差足し  
奥の、納戸に入にけり、清十郎はそれとも知らず扱は彼奴等は寐入りしな、エ、  
憎さも憎しとても斯くなる憂き身なり、身代の敵この首尾に助けておめ／＼戻ら  
れず、勘十郎めを刺殺し有甲斐もなき我命、爲損ふたら浮世は開後前見へぬ出来

○顛骨さかほね 顛骨、口を悪んでいふ。

○鳩尾 水おち。鳩尾は身體の急所である。

○南無三寶 (見索引)

○うぬが身の火を吹き消し 勘十郎の提けた行燈の火を吹き消すのこ、源十郎の自ら招いた業苦を死によつて消滅さすのこ、清十郎が人殺しを暗まして、其の苦惱を消すのこをいひかけた。火には關照、苦痛の意をいひかけた。

心、内の勝手は覺えの庖丁心の錆も荒砥の研ぎ立て、尋ね寄れば高射前後も知らず不思議の本望、夜著引退けて咽笛をぐつと刳れば源十郎、「うん」といふを引起し肝先を一刀、又刺し通して息を止め耳に口をさし寄せて、「こりや勘十郎、まだ魂はよも去るまじい能つく聞け、傍輩に科を著せ身の爲にせし報の劍、名乗り合ふて殺さぬは近比残念至極ながら、讒訴したる此顛骨」と、願かけて斬下げ、「此胸から企んだか」と鳩尾先を背中まで、思ふさまに止めを刺し死骸を夜著に押包み立上れば血落ちて滑つて仰向にどうど伏す、はつと起きて蒲團にて足摺り拭ひ静々と、身仕舞して立たる所に奥よりお夏は手燭の影、表へ出るを「これこれ、ム、其所にか」と走り寄り、血に滑つて「ア、怖」と、聲を立るを押鎮め様子を囁き「此上は、一處に退かん」と言ふ所へ行燈提げて勘十郎、納戸の方より来る體南無三寶人違へよし是も己が身の火を吹き消して車戸を、押開け飛んで出にけり後れてお夏は詮方なく、蚊帳打上げ身を潜め生きたる心地はなかりけり、此音に勘十郎走り寄つて手燭を上げ、夜著引卷つて「ヤア源十郎が斬られたは」と呼ば、る聲に主下人男女残らず起き合せ、「疑ひもなき清十郎門の戸開

○引入れあるか 内から手引きして、引入れた者があるか。

○曲者 曲断のならぬ者。

○落ちんと契りにし 共に落ちのびようを契約したりし。前文に「此上は一處に退かん」とある。  
○夜の鶴 橋野の雉子・夜の鶴というて、鶴は子を深く思ふものである。「詞花集」羅上部の歌に「夜の鶴部の内にこめられて、子を戀ひつつもなき明かすか」。『白氏文集』に「夜鶴懐子籠中鳴」。

○野べの雉 夫婦間の離れに喩ふ。近松作「心中天の網鳴」名ごりの橋づくしの條に「狩場の雉の、妻ゆき我も首締め括る民結び」。

○八つ 午前二時。

○七つ 午前四時。

○辻行燈 辻番所の行燈。辻々に番所を設けて町内を警戒したものを辻番所と稱した。

いたは落ちつらん、引入れあるか吟味せよ」と上を下へと返せしが、なふお夏さ

まが御座らぬは、「ヤア是を曲者捜して見よ」と、二階・内藏・縁の下・湯殿まで

捜せども、蚊帳の内は氣も附かず「表の口に錠卸し、裏を捜さん」「尤」と提灯

燈して駆け惑ふ、お夏は我身の恐しさ清十郎が氣遣ひさ、氣も逆立て散亂し「南

無天照大神様、観音様・氏神様死ぬとも二人一處に」と、胸を騒がす折からに勘

十郎が聲として「蚊屋の内を見なんだ捜して見よ」と言ふ聲す、南無三寶と飛ん

で出表には錠下りたり、裏には大勢満ちたり、跡へも先へも因果の網の、懸

かる憂き身は佛神の直なる法も横町の、間の細路地蹴破ればさつと開くも戀路の

念力、懸けし願ひの神力の神變奇特。毒蛇の口、遁れ出たる如くにて落ちんと契

りにしの辻東の辻に「なふ我夫々々」と、聲を限りに往き返り「扱は俘となりけ

るか」と、早狂亂と成る鐘の響きの末に「あれお夏、と呼ぶはいのおふ、お

ふ其處にか何處にぞ、いや〜いや待て暫し、あれは我屋に父の聲我を尋ねて我

を呼ぶ、親もゆかしや夫も戀しや、父は子を呼ぶ夜の鶴我は夫呼ぶ野べの雉、

追つ懸け行かん夜は何時ぞ、鐘は幾つ、八つか七つか曉風の、辻行燈を吹消し

○卵を渡る危き 異邪の危き。形勢の極めて  
危険なさまに譬へていふ。

て道も心も眞暗々、くるくると狂ひ亂れ泣き亂れ、亂れて歌ふ雞の卵  
を渡る危きの狂女となるこそ 哀れなれ

下之卷 (お夏笠物)  
狂。刑場)

登場人物の主な者

お 俊 (左治右衛門の娘。  
清十郎の妹)

お 三 (清十郎許嫁の娘)

お 夏 (九左衛門の娘。  
清十郎の愛人)

清 十 郎 (もと九左衛門の重手代。  
お夏の愛人。二十五歳)

九 左 衛 門 (米問屋但馬屋の主  
人。六十歳に近い)

勘 十 郎 (九左衛門の悪手代)

左治右衛門 (和泉國水間の里の農夫。  
清十郎の父。六十餘歳) 代官職や警固の役人。見物人等

梗概

夏の頃、お俊・お三は熊野比丘尼となつて、節もあはれに流行唄を歌ひ、清十郎の行方を尋ねて旅に出る。

艶麗であつたお夏は、長い苦惱の爲に面瘦せて、髪も蓬のやうに亂れ、心も狂亂となつて道傍にさまよふ。折から二人の尼の  
通りかかつたのに話かけ、愛人清十郎の在處を尋ねて、計らずも三女共に清十郎のゆかりの者である事が知れ、相寄つて互に心  
の悲痛を語つて歎く。中にもお夏は、「神様も佛様もどうして愛人に逢はせて下さらぬか」と、消え入るばかりに悲しんだ。が兩  
尼から、清十郎は長崎で捕へられ、此處で曝首にされると聞き、身を悶えて泣き入つた。

暫くして、美しかつた清十郎が、見變ふばかりに色は黒み目は落ち、繩を掛けられた哀れな姿で、警固の役人に引かれて刑場に現はれる。大勢の見物人は其の様子を見て面を背け、噁り泣きして念佛を唱へる。

清十郎は既に觀念してひたすら佛を念じ、菩提の道に志してゐたのであるが、お夏を見て愛著の涙を浮べ、己が身は主人とお夏とに捧げてゐた真心を語り、勘十郎の爲に陥れられて、金七十兩をごまかした盗人などの冤罪を被せられたのを、恨めしげに悲しんだ。

彼は此の世の思ひ出に煙草一服を所望した。役人がこれを許すと、お夏は群集の中から駈け出で、煙草を吸附けて愛人に差出す。清十郎は嬉しげに其の煙管を取り、やがて我が咽に突込んで自害する。お夏は驚いて、「口惜しや私は死後れた。自らは清十郎の妻但馬屋のお夏であります。どうぞ皆様のお情によつて、夫と一處に埋めて下され」とて、立てかけた拔身の鎗を引つた。くるやうに押つ取つて咽を刺した。

其の知らせを聞いて代官所の役人が駈け附ける。但馬屋九左衛門や其の手代勘十郎等も召されて来る。左治右衛門もあわてて足を空に走り附け、代官職に一禮して、「お願申上げます。私の娘らが道頓堀の芝居木戸で取違へた笠の中から、此の書狀が出ました」とて差出した。其の文によつて、勘十郎がお夏の嫁入道具支拂金百四十兩を横領し、其の金を傍輩の源十郎に送つて、自分商ひにした赤穂鹽の損銀を埋めた事が知れた。又清十郎が盗んだとされた七十兩も、勘十郎が盗んだ事を自白したので、其の場で役人の爲に縛られる。

清十郎は心地よげに其の様子を見ながら、重傷の爲に次第に弱つて絶命する。泣き崩れてゐるお夏は、家人に連れられて家に歸り、尼法師となつて亡き愛人の冥福を祈つて世を終へた。

評

お夏笠物狂の場は哀愁の氣が滲ひ、絢爛華麗の極致を盡した妙文である。實に本曲に於ける興味の中心となつて、讀者の胸を

打つであらう。

己が慕ふ夫に愛される事は婦人の最大幸福である。其の望みを失つたお夏は、狂亂となつて父を忘れ家を忘れ、いたましい姿となつて、愛人の行方を尋ねさまよつた。そして漸く逢ふ事が出来たが、其の人の姿は以前の美しさとは全く變り、面妻れた繩附の大罪人であつた。けれども彼の女は慕ひ寄り、身を悶えて泣き、煙草を吸附けて吞ませた。それが今生の別れであつた。其の後彼の女は尼となつて、亡き愛人の菩提を弔つた。

あはれ戀の情熱から純眞の愛に變つて佛弟子となる、この涙にしめるお夏の戀物語は、近松の靈腕によつて我等の心に永く残るであらう。

お夏笠物狂 下之卷

○夜さ来い：清十郎と寝た處エ 流行唄に據つたもので、近松作「軍井筒」にも引用されてゐる。「明解黄治小歌集」(東洋文庫所藏、寛本)笠物ものくるひの歌に、「戀さいふ字を金紗で縫はせ、神の力も叶はぬか、空もかもじもかなぐりすて物に狂ふぞ哀れなり」とある。紀海若撰「花山院都巽みやこのたつみ」れんはの辻占に、「よさ来いといふ字を金紗で縫はせ、裾におてき寝たところ、裾におてき寝たところ」とある。

○少勸 勸は勸進の略。勸進の爲に少しの喜捨を乞ふ意であつて、熊野比丘尼のいふ語。近松作「主馬しゆめ判官盛久」法性覺道行の文中、熊野比丘尼の言葉に、「我々は熊野比丘尼、如何なる箇所も御免の言葉に、柳なごの葉は入りませぬか、ちごくわんくわんご御せける」とある。

○観ずれば夢の世や：心留めぬ假枕 歌念佛の歌詞である。

「夜さ来いといふ字を金紗で、縫はせ、裾に清十郎と寝た處、裾に、清十郎と寝た處エ、少勸、観ずれば夢の世や、寝て温めし懷子、いつの間にかは浮かれ初め、三界を只家として、袖笠雨の、宿りにも、心留めぬ、假枕」、流れにあらぬ川竹の、笹の小笹の拍板、花の手被ひ、お手を引かれた、是も熊野の修行かや、姉さまの是の、勸進柄杓の、笑顔好しとて柳が招く、柳の髪を何故に浮世恨みて尼

○三界 欲界・色界・無色界をいふ。三界はいづれも有漏の迷界なれば、愛染即ち現世の意にいふ。三界を只家としてしは、現世を以て家と心得て、一處不住の法師なるをいふ。

○袖笠 袖を袂かづいて笠に代へること。この文は、雨が降れば袖笠の雨宿りをして、假枕の旗被をして、行雲流水の身となつて物に執着せぬ意。

○流れにあらぬ川竹の 遊女を川竹の流れの者といへども、こゝは遊女ではない。川竹から、笹の縁語につづけた。

○びんざさら 往時用ひた樂器。長さ五寸幅二寸ばかりの薄き板を幾枚も重ねて、其の一端を綴合はせ、相擊つて音を發せしめるもの。但こゝは、竹で麓(ささら)を作り、刻みある木竿と相擊つて音を發せしめた物をいふ。ささら。

○花の手被ひ 花のやうな美しい女の手に、手被ひを附けてゐること。手被ひは、手袋の手の甲のみを被ふものをいふ。手甲。熊野比丘尼は手被ひを附けた。

○お手を引かれた お俊・お三が熊野比丘尼となつて、手を引き合つてゐるをいふ。

○熊野の修行 熊野比丘尼をいふ。紀州熊野権現の縁起を語り、牛王(ごわう)の札を配つたものである。後には隠し白粉、薄粧を附けて伊達姿となり、歌念佛または流行節をうたひ、小歌を便りに色を賣る尼となつた。これを歌比丘尼といふ。七枚起請などの齋齋に用ひる牛王の群鳥(むらからす)の紙などは、この比丘尼が賣り配つたものである。こゝの文にある「夜さ來い…心留めぬ假枕」「姉さまの

崎、あまがさき 尼崎とは海近く何故に、こオクリなせ 其方はしほが無い、きたた 節は哀れに身は伊達に、だて 歌は念スエナ 佛の歌比丘尼、あまがさき 向ひ通るは清十郎じゃないか、ユリ 笠が能く似た、フツくる 物狂ひ、ハル 物に狂ふも我ばかりか、ツツ 笠が能く似た笠

が、笠が能く似た菅笠がゑる、笠を知るべの、ツツ 物狂ひ、ハル 物に狂ふも我ばかりか、ツツ 笠が能く似た笠

○柳の髪 柳の絲の如く長く美しい髪。近松作「骨振崎心中」に「柳の髪もさくく」。近松作「女殺油地獄」に「細々の柳髪や柳髪」。

○尼崎 (見索引)。尼を尼崎にひかけた。

○しほ 愛嬌。「しほはしほらしのしほである。「しほらしはもろしをらしの假名なると、しをる」「しをらしなどいふ語は、拙(たわ)む意で、折れ曲る、なよ／＼と弱々しいの意より轉じて、やさしい、愛らしいの意にもいふのである。こゝの文は「漣」をひかけた。

○念佛 歌念佛の唱歌をいふ。歌念佛は俗曲の一種、鉦を打鳴らし、念佛の節で歌ふもので、元祿か享保にかけて流行した。これを歌ふ者は僧衣を著た男、又は歌比丘尼の類であつた。前の文に「對するは夢の世や…心留めぬ假枕」とあるのも、歌念佛の唱歌の一つである。「人倫訓蒙圖彙」卷七に、「夫れ念佛といふは萬徳圓滿の佛號なり、然るをそれ節をつけて歌ふべきやうはなけれども、末世愚鈍の者を導き、せめて耳になりとふれさせべきの權者方便ならん、それをなば觀りて色々の唱歌を作り、これを鉦に合はせてはやし淨瑠璃にせずといふことなしとある。

○歌比丘尼 「人倫訓蒙圖彙」元祿三年刊卷七に、「歌比丘

尼川もとは清淨の立派(たては)にて、熊野を借して諸方に勸進しけるが、いつしか衣を略し齒をみかき、頭を仔細に包みて小歌を便りに色を賣るなり、功輪歴たるを御寮(おれう)と號し、犬に山伏を持ち、女童の弟子あまたとりてしたつたりなり、郡鄙にあり、都は建仁寺町樂師の團子に侍。皆これ末世の護なりとある。前文にあひ「熊野の修行の註をも見よ」。

○向ひ通るは清十郎 菅笠がゑる 貞享頃流行した唄に據つたのである。西鶴作「五人女」(貞享三年刊)卷二に、「里の童子(わらんべ)袖引連れて、清十郎殺さばお夏も殺せ、と歌ひける、聞けば心に懸りて、お夏奪てし屍に尋ねければ、返事しかねて涙をこぼす、さては狂亂になつて、生きて思ひをさしやうよりも、子供の中に交はり音頭取つて歌ひける、皆々これを悲しく様々ごめてもやみ難く、問もなく涙雨ふりて、向ひ通るは清十郎でないか、笠がよく似た菅笠が、やはんははのけら〜笑ひ、うるはしき姿いっさなく取亂して狂ひ出でける」。

◇この唄を歌つて狂亂のお夏が現はれる、誠に哀痛の極みである。

○笠を知るべの物狂ひ 笠をたよりに、あの笠を被れるは愛人清十郎であると思つての物狂ひ。

○鐘に待宵鳥には別れ 戀人が宵に来ることを待たせ、更け行く鐘の聲を聞き、また戀人さ違つても、夜明けを告げる鶏の聲を聞けば、飽かぬ別れをする心づらさ。『新古今集』戀部三、小待従の歌に、待つ宵に更け行く鐘の聲聞けば、飽かぬ別れの鳥はものかはし。

○傳へ聞く孔子は鯉魚に別れ、藥恨む  
 諸曲(天鼓)に傳へ聞く、孔子は鯉魚に別れて、思ひ  
 の火を胸に焚き、白居易は子を先立てて枕に残る藥  
 を恨む」とあるに據つた。支那の聖人孔子の長子伯  
 魚は、孔子に先立ち年五十で歿した。又唐の詩人白  
 樂天は、愛兒の死んだ時に藥の残れるを見て悲しん  
 だ。「白氏文集」病中哭愛兒詩の句に「故  
 衣猶架上、殘藥尚枕頭」とある。

○いとしばや 悼しいわい。「いとしばは、い  
 とはし(草)の「は」と「し」が轉倒した語。

○かいろ 鹿の鳴聲。秋は鹿の交尾期で、牡鹿  
 が牝鹿を撫でて鳴く、其の牡鹿の鳴聲が哀れゆにカ  
 ヒイヨの如く聞えるのを、「かいらう」俗名又は「か  
 ひろ」にせりなした語。「古今集」雜體部、きのよし  
 ひこの歌に「秋の野に安なき鹿の年を經て、なぞや  
 が戀のかひよ、とぞなく」とある。

○空目 見遠へること。誤認。

○丸太舟 舟の一種、圓木のやうな形したもの。  
 「和漢船用集」五に「丸木船其形丸木を刻たが如  
 し、故に丸太船」と云ふ。これに丸太をいひかけた。「丸  
 太」とは、小歌を便りに色を發する歌比丘尼といふ。飯  
 袋子撰「籠之色卷五」に「比丘尼は女僧なり、五三衣  
 を著て佛道を修行すべき身の、いかなれば那行の戒  
 を破て姪を賣ることを活業とするや、其れか、れも活女  
 がいひけん木の端(索引)によつて其の條を見よの類  
 なれば、丸太と呼ばれるも宜なり、この文は、お  
 俊、お三が滑十郎を尋ねる爲に熊野比丘尼と云つた  
 のを云うたので、賣業婦ではない。

に待宵鳥には別れ、戀する人の夜なを氣違ひとてな笑ひ給ひそ、傳へ聞く孔子  
 は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き、白居易は又我子を先立てて枕に残る、藥恨  
 むは理やそれは子故の、別れの涙、親より子より我身より、いと殿御の、い  
 としばや、それより便宜言づれの、聲も聞かねば顔も見ず我は秋鹿夫を戀かいろ  
 と、鳴く、と、知らせたや、なふくあれ成僧我殿御返してたべ、何處へ連れ  
 て行事ぞ、男返してたべなふ、いや御僧とは空目かや、我も焦がる、丸太舟浮  
 世渡る一節を、歌へや歌へ泡沫の、小舟造りてお夏を乗せて、花の清十郎に船を  
 押さしよる勸、觀音薩埵の誓には、枯れたる木にも花笠、「笠に挿いたは柳の葉」、  
 「腰に挿いたも柳の葉」、「一枝」、「二枝三日に三枚七日に七枚、起請誓紙の、牛  
 王の裏なく灰に焼きつ、互に飲んだる、水も洩らさぬ、中々に、引も合はせぬ神  
 心、熊野の神のお留守かや、足柄箱根、玉津島、貴船や三輪の明神も、神共覺へ  
 ぬ神ならば尋る人に逢はせて見や、「それ」逢はせず逢はれぬは皆偽りの御神  
 と、譏つても祈つても、神の力も叶はぬか」と、笠も鬘も搔投り棄て狂ひ、歎く  
 を哀れなる、共に、濡らせる尼衣、二人の比丘尼も涙を押へ「我も尋る人故に、

○うたかた うつかた(宍形)の轉。泡沫。この文は、「清がるる丸太舟」の縁で、「歌へや歌へうたかた」と頭韻法を用ひ、又「うたかた」の縁語小舟に、いひつづけた。

◇「小舟遊りて」櫂を押さしよと、哀婉な調子で歌ふこの比丘尼歌を聞くお夏は、胸も張裂ける心地がしたであらう。

○花の 花の如き美男。

○勸 勸進の略。勸進の爲に喜捨を乞ふ意で、熊野比丘尼の公説。

○観音薩埵 枯れたる木にも花がさ  
「薩埵」は菩提薩埵 Bodhisattvaの略で、菩薩と同じ。観音薩埵は「手観音菩薩」をさす。「花がさ」は、花が吹くを花笠にいひかけた。「手陀羅尼經」に「念彼觀音力、枯木亦開花」。

○笠に挿いたは 腰に挿いたも 柳の葉  
狂言「つんば座頭」の小歌に、「此處過る熊野道者の、手に持つたも柳の葉、笠に挿いたも柳の葉、これはあなたのお聖様ぞ、笠の内がおゆかし。西澤與志撰「野傾友三味線」卷二に、「こを通る熊野道者、手に持つたも柳の葉、笠に挿いたも柳の葉といふ歌を、今の目から見れば云々」。柳は那木、木の合字で、漢名竹拍といひ、一位料の樹で高さ二三丈に達す。其の葉は竹に似て厚い。「熊野縁起」に「大神嘗國(紀伊)に垂跡の初め、先づ切目の玉名木(たまぎ)の淵に現はれ給ふ」とありて、即ち都は切目王子権現の神木である。熊野比丘尼は柳の葉をも愛つたもので、近松作「玉馬判官盛久」の法性覺道行の文中、熊野比丘尼の言葉に「我々は熊野比丘尼、如何なる所も御

假りに扮せし修行の道思ひ當る事あらば、知らせ申さん國所・有様語り給へとよ、  
「嬉し」の人の問ひ言や、國は播州姫路の者、尋る夫の容形、姿は詞に、語る共心

は筆も及びなき、ぼんじやりとしてきつとして花橘の袖の香に、昔男の業平作  
り黒い羽織が好き梳油、髪付き髪付眞黒々、黒目勝ち成目の中に鼻筋通つて櫻色、  
年比は廿餘り背高からず低からず、茶の湯・盤上・打囃 男の藝に一つでも、疵

免の者、柳の葉は入りませぬか、ちみくわん／＼と仰せける」  
○七枚起請誓紙 起請は神佛の照覽を請願する意で、誓ひ文をいふ。これを熊野權現又は二月堂などから出す牛玉の誓紙七枚を組合はせて其の裏に書く。之を七枚起請文といふ。近松作「生玉心中」に「變るまいとの七枚起請書いて二人が取交はす」。

○牛玉 (見索引)

○裏なく 裏に書いた誓詞のあとかた無く。

○足柄 足柄神社は相模國足柄上郡南足柄村田野にある。「伊勢音頭」見眞砂(後世の編集)は男女の唄に、「またほめ足らぬ男ぶり、思ひのほすが願りか、足柄・箱根・玉津島・貴船や三輪の明神さま、末の願の長まくら、千代萬代もへ」。

○箱根 箱根神社は相模國足柄上郡元箱根の蘆湖畔に面せる景勝の地にある。往時は武家の倉庫の厚かつた宮で、今は國幣小社である。

○玉津島 玉津島神社は紀伊國和歌浦にあつて、古來名所として知られた古社である。

○貴船 貴船神社は山城國愛宕郡鞍馬村にあつて、今は國幣中社である。

○三輪の明神 大和國三輪町にある大神(おほみわし)神社をいひ、今は國幣大社である。

○とよ 感動を示すに用ひた元祿頃の用法である。

○ぼんじやり おほやうで溫和なるをいふ。

○花橘の袖の香 「古今集」夏歌の部に、「五月待つ花橘の香をかひは、昔の人の袖の香ぞする」とありて、懐しう匂ふ花橘の香に、昔の人の袖の香を聯想するといふに據つた。

○昔男の業平 在五斗將在原業手をいひ、平安朝時代の人である。類的美男子であつた。「伊勢物語」は、この人の事を書いたものである。

○盤上 藝將奏、變六などの遊び。近松作「再整太平記」に「お主の歌は打忘れ、盤上亂舞の遊び事」。

○打囃 鼓・太鼓などの音楽。

○疵なき玉の杯 情深くして缺點のない男に喩ふ。「徒然草」第二段に「よづに、みじくも色好まざらん男はいとさうぞうしく、玉の杯の底無き心地ぞすべき」。

○萩の露 假名文字兼讀の體致あるこゝに喩ふ。「古今集卷四、秋歌上の部に、をりてみは落ちぞしぬべき秋萩の、枝もたわねにおける白露」と見え、また小野道風兼讀の假名書歌帖に「安藤破起帖」といふがあるによつて、斯くいうた。そして其の「安藤破起帖」の首に「古今集」の歌「秋萩の下葉色づく今よりや歸りある人の聲いぬがてにする」が載つてゐるにより、「凝ねがてにする」を「ころび凝し夜の」に改作したのである。

○濱松ねはれて：顯はずな 「御船歌留」卷下、住吉節に「大坂出てから住吉さまへ、松にねはれて顯はるる」。

○末の松山浦の波、上越す人もなかりしに 「後拾遺集戀の部に、契りまなかたみに袖をしほりつつ、末の松山浦さじとほ」とある歌に據つて文をなしたもので、契約を違へず、この上もない好い人であつたにの意。「末の松山」は陸前にも陸奥にもあつて、海岸から遠い所。

○夏果つる扇の女の物狂ひ 秋になつて捨てられる扇を眺め入つて、我が身の受けた飯盛も、その如くやがてあき風が吹いて見捨てられるのであらうと思ひ悲しみ、遂に心が狂つた班女の故事に據り、扇にお夏をいひかけた。謡曲班女に「夏はつる扇の秋の白露さ、いづれか先に起き風しの」。新古今集「卷三、夏の節の歌に、夏はつる扇の秋の白露さ、いづれか先に取かむとすむ」。

○一つ流れの和泉の國 三人の女が何れも清十郎に縁故の者である意。流れの縁で泉につづけ、清十郎の故里和泉國水間の里にいひかけた。

なき玉の杯の、酒もよい酒假名文書き手の萩の露、轉び寝し夜の睦言は己と、其方が中ならで、岸の濱松寝惚れても、洩らすまいぞや顯はずな、變るまじきと、末かけし末の、松山浦の波、上越す人も、無かりしに友傍輩の猜みにて、犯さぬ罪の徒名を啣ち世を愛き物に出給ふ、今は我名を包みても何か其甲斐夏果つる、扇の女の物狂ひ、其人の名は清十郎、有し姿は變る共、まだ面影は殘るべし、教へてたべの人々」とて伏し沈、みてぞ泣居たる、二人の比丘尼すがり附「扱こそは餘所ならぬ、一つ流れの和泉の國其人の爲にこそ、我は妹」、「我は嫁」、「親の歎きを宥めかね共に亂る、我身をぞや」、「狂女といふも、何故ぞ」、「其方は妹背の忍ぶ草」、「一身は同胞を思ひ草」、「同じ由縁の草葉ぞ」と手に手を執りて泣叫ぶ、物の哀れを留めける、

「なふ淺ましや今里人の語りしは、但馬屋の清十郎は人を殺めし科によつて、方へ追手かゝり、長崎とやらんにて終に捕はれ囚人と成、あの松陰の竹垣にて七日曝し其後は、但馬屋の門口に懸げらるゝと語りし故せめて餘所目の暇乞に是迄は參りしが、御存じなきかいとほしや」、「何我夫は捕はれて終に首を斬ら

○其の人 清十郎をさす。

○元一筋 元は懸の一筋に、縛り繩の手許一筋をいひかけた。

○矢拂 人を者を追ひやらふ義。捕。

○土壇 斬罪を執行する場に土を築いた壇。「徳隣殿秘録」(寫本、東洋文庫藏)下巻に、「土壇守法」高さ二尺四寸程、長さ二尺五寸程、上横巾一尺五寸程、下横巾一尺二寸程」とある。

○羽交締め 兩手の肩と背との間を縛ること。重罪人の縛り方は、昔はいづれも此の法によつた。近松作「曾我兼光山」第五に、「羽交締め」に引つ括り、家來が手にぞ渡しける。」

○菩提 佛果の意。後生未來の果報。(見索引)

○清十郎殺さばお夏も殺せ：思ひをさしよよりもエ 貞享頃流行した唄に據つたのである。前文向ひ通るは清十郎「曾我が五」の頭註を見よ。

る、とや、それは誠か今迄は狂氣の中にも若もやと、頼む念力切れ果て、同じ  
 刀に斬られん」と駈け出るを二人の尼、歎きは變らぬ我々なれど最期に心亂れて  
 は、人の誹り後世の爲、皆其人の仇ぞ」と泣く、制し止むれば、早先拂ひの、  
 警固の者山賊夜盜の其如く、厳しく固め引出す生きての思ひ死する罪、元一筋の  
 縛しめの、細目に遭ひて清十郎引かれ出るぞ無慚なる、矢拂の内に土壇を構へ高  
 手を許し羽交締め、北向に引つ据ゆるは目も當てられぬ風情也、お夏は涙に目も  
 明かれず聲も立たねど伸び上がり、なふ爰に居る是爰に顔を向けて下され」と、  
 呼ははる聲も往來の群集の歎き念佛に、紛れ聞へぬ哀れやな不便やな清十郎、顔  
 も形も瘦せ衰へ最期極る心にも、後生菩提も思はれずお夏が歎き故郷の、親兄弟は  
 如何がぞやお夏に知らせ今一目、せめて面影ばかりでも姫路の方をと見廻して目  
 と目をふつと見合せて、お夏はわつと泣き出す、清十郎は聲立てず、肝より出る爰  
 き涙刀の刃より先さきに、思ひに命絶へぬべし、涙を中の懸橋と心通はす心の色  
 世に取沙汰の諺や、清十郎殺さばお夏も殺せ、生きて思ひをさしよよりも、思  
 ひを生きて、生きて思ひをさしよよりもエ」  
 南無阿彌陀、なむ

◇千金萬金より一遍の回向に勝る寶なし——清十郎が煩惱を解脱して、ひたすらに成佛を祈り、最期に心の亂れぬまを示した。

○高札 たてふた(懸札)。重罪の者には、木の札に其の罪状などを記して、路傍に高く建ておき、民衆に示したるもの。

○業 因果。

○非業 前世の業因によらず、現在の災禍に由るもの。

○高き山：求むるが如し。欲しても及び難きに喩ふ。

○善根 諸善を増長せしめる根本。功德の意。

○頓證菩提 或る機会に遭遇して、頓に迷妄を去り、佛道を成就して佛果を證得すること。

○情のお主 暗にお夏をさす。

○一樹の蔭も他生の縁 同じ一樹の蔭に兩宿りするもの。この世から兩契りて、前世からの因縁であるこの意。「説法明眼論」に「宿一樹下、涙一河流、一夜同宿、皆是先世結縁」。

○十惡 殺生、偷盜、邪淫(以上身業)、妄語、綺語、惡口、兩舌(以上口業)、貪欲、瞋恚、愚癡(以上意業)。

○五逆 佛教で説ける五つの大逆罪、即ち殺父、殺母、害阿羅漢、破三和合儀、出佛身血をいふ。この罪を犯す者は必ず無間地獄に墮るといふ。よつて五無間業ともいふ。「法華綱目」には、殺父母、破三和合儀、出佛身血、殺阿羅漢、破羯磨僧と

あみだ佛なまみだ、地南無阿彌陀佛」と回向して皆々袖を中絞ハルりける、清十郎涙を押へ、何れも有難き御回向千金萬金より、一遍の回向に勝る寶なしと承る、最期の悦び何事か是に如かん、さりながら心に懸るは此高札、主人の金七十兩盜むとは身に取つて覺へなし、相手勘十郎を切殺さんと思ひしに、誤つて人違へ遁る、も業悦びならず、殺さる、も業歎地きに中あらず、某生年廿五歳十一歳の春より奉公し、主人の養育み情にて商人の道一通り、藝能文字の本末迄人竝に成たるも、皆はお主の御厚恩、明暮れ主の教に任せ親に孝行主に忠、只正直を守つて一言も、偽りを言ふまじと毎朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲しさは只今非業に死なんとはい思ひも寄らず、佛共法共一遍の念佛申せし事もなく、今の悔しさ詮方なく、高き山の頂地きに中にて、一杯の水を求むるが如しとは此身の上地に中知られたり、此群集の中にこそ、清十郎が一命に代らんと嘆く人も有べきぞ、必々儼事也長らへて追善し、菩提を弔ふ善根こそ命を助け、不老不死の藥を與ふるよりも嬉しきぞや、人々の回向を受け佛の御國地に中到らんと、思へば、此世の絆はふつ、と思ひ切たぞや、ア、思ひ切ても切られぬはいと可愛の唯一人、よし是も夢の戲ふれ

見えてゐる。○充滿吾願如清涼池 吾が願事を満足に成就して、恰も涅槃佛の境界の如しとの意。清涼池は涅槃の無執體を形容していふ。原本「吾願を」其願に作る。

○修羅 梵語阿修羅 Asura の略。惡心強く猜忌嫉妬妄執の念旺盛で、常に鬪争する印度鬼神の一種。

○惡趣 地獄に往の義で、善惡の業因によつて趣くべき所。地獄・餓鬼・畜生・修羅を四惡趣といふ。

○沙羅林 沙羅樹は東印度原産の粗葉香料の喬木である。葉は大形で互生し、卵狀長橢圓形の端尖り、樹皮は青白色で、花は小形淡黄色の花蕾である。

古昔阿育王那竭羅城外に沙羅樹林があつて、其の中の四株は特に高く、相對して雙をなしてゐたので沙羅雙樹といふ。釋尊は其の間で佛教を説き、遂に涅槃に入られた時、雙樹は垂れ覆つて白色に變じたといふ。

○栴檀の霞 栴檀の香煙をいふ。栴檀樹を焚いて釋尊を茶毘に附した故事に據つたのである。栴檀樹は印度半島の雨量少い丘陵地に産し、高さ二丈五尺に達す。其の色年を経るに従つて、白色より赤色を帯びて香氣愈々高くなる。故に白栴檀・赤栴檀など名稱がある。

○三寶 佛法僧をいふ。佛があつてここに法が説かれ、其の法は僧によつて傳へられる。この三つのものは佛教によつて最も貴い寶である。

○三十三天 初利天「たうてん」をいひ、帝釋天王の居所がある。「金剛經」の註に「須彌山在四天下之中、爲三十三天者、故名三十三、日月遊山而行以爲晝夜、由此而分四圍爲四天下、其山頂有

四階、每階八天、共三十三天、帝釋居中以爲三十三天」。

五十年忌歌念佛

頓證菩提南無阿彌陀佛」と、潔くは言ひけれ共お夏が嘆き妹の、變れる顔を尻

目かけ覺えずわつと泣き出せば、お夏を初め二人の尼警固の上下縁もなき、貴

賤群集に至る迄皆々、袖をぞ絞りける、稍あつて清十郎「いかに警固の方々、口

乾きて苦しきに煙草一服所望したし、此群集の其中に姫路の人も有ならば、吸附

けて給はれかし情のお主の御手より、末期の水と觀念せん如何があらん」と言ひ

ければ「苦しからじそれ〜」と煙管・煙草を出しける、お夏悦び「なふ我こそ

姫路の者、一樹の蔭も他生の縁まして一つ國なれば、未來も一つに生るゝ爲約束

の煙ぞ」と、餘所ながら暇乞ひ煙草吸附け垣越しに、警固の者取次ぎて清十郎に

ぞ渡しける、夫婦は物も言ひたげに顔振上げしが咽せ返る、涙を中の關の戸にて

免角の詞も出ばこそ泣くより外の、事はなし、やう〜涙を押し止め「人も多きに

御身の手より、末期の一服を受くることの有難さよ本望さよ、此煙草にて十惡・

五逆の眠りを覺し、充滿吾願如清涼池」と嘯きて、地獄・餓鬼・畜生・修羅此四

惡趣の苦患を解脱し、吹出す煙は沙羅林栴檀の霞と變じ、三寶供養の燒香となつ

て、三十三天に薫じ渡らば日月は、兩の眼に入代り給ひ、梵釋二天に手を引かれ

○梵釋二天 梵天、帝釋天。

○佛の御前に 佛の御前に参らん。

○藻鹽焼く煙 前文に「尼崎とは海近く」とあるに應じ、尼崎で藻鹽焼く煙や、又煙草の煙をさして斯くいうた。

○鷲の山 鷲鷲山をいひ、山形が鷲に似てゐるよりの名。「法華經科註」に「着聞顯此云鷲鷲、…山峯似鷲」。

○靈山淨土 靈山は靈鷲山の略。中印度摩訶陀國にある着聞顯山をいふ。釋尊は現世から姿を隠し給へども、其の實は靈鷲山にあつて永遠に説教されてゐるのである。即ち靈鷲山は寂光淨土である。

『法華經』香量品の偈に「爲度衆生故、方便現淨土、而實不滅度、常住此靈鷲山說法」。

○二世の妻 夫婦の縁をいふ。陸に「親子は一世、夫婦は二世、主従は三世の縁」といふ。

○成敗 成は就る、「敗」はやぶる義。政事を取扱ふにいひ、轉じて刑罰を加へる事をいひ、更に轉じて新業せることをいふ。

奉り、佛の御前に此度は立別る、共藻鹽焼く、煙は同じ鷲の山靈山淨土で待べきぞや、南無阿彌陀佛」と言ふより早く煙管押つ取り雁首迄、咽の内へ押込んで眞逆様にぞ伏したりける、警固の上下ふためきて「それ殺すな」と引起せば、色も變つて目くるめき血は紅の瀧つ瀬と、口に流る、風情を見て「口惜しや後れたり、我こそ清十郎が二世の妻但馬屋のお夏、人々の情には同じ土に埋みて給へ、南無大悲觀世音助け給へ」と、立てたる拔身の槍押つ取り咽笛ぐつと突通す、二人の比丘尼抱きつき「なふ皆様頼みます」と、泣けど叫べど囚人の自害に各仰天して、痛はる人も無かりしは是非に叶はぬ次第也、城下に斯くと注進す代官所の役人、馬を飛ばして駈け來り矢拂の内に飛んで入、大聲あげて「ヤア早まつたり清十郎、汝傍輩の源十郎を、人違へにて殺めし段は白狀紛れなしと云へども、盗人の科いまだ分明ならぬ故、曝者となして成敗の日を延ばし、盗人の本人現はれなば汝が命を助けんとの評議なりしに、近比殘念千萬也只今但馬屋一家を召寄する、事の詮議濟む迄の命を生きんと思はぬか、狼狽者」と力を付二人が口に氣付けを入、さまじく看病なし給へばお夏は少し息出る、清十郎は心・肺の臟腑を

○道頓堀にて取違へ 上之巻に「道頓堀の芝居過ぎ、中之巻に「ア、過分々々、隨に屈き請取つたが、其狀も請取も大事にかけ笠の頂きに人れ置き、其笠を通頼羽の群衆に、芝居の木戸に預けて餘所の笠と換はつて、詮議しても知れなんだ」とあるに應じ。

○損銀 勘十郎が私商ひにした赤穂屋の損銀。

○下り 大阪から姫路に歸り來るこゝをいふ。

破りし長煙管頼む方なく見へにける、程なく「但馬屋九左衛門・手代勘十郎、一家残らずお召によつて參りたり」とぞ訴ふる、斯かる所へ老ひたる百姓あはた、敷狼狽へ來て、一目見るより「南無三寶しなしたり、待てむざ」と一人は殺さぬ敵を取つて取らせふ」と、せきくる涙を押拭ひ謹んで、我らは清十郎が親和泉の國水間の左右衛門、年寄ながら面目なや其勘十郎めに瞞され、お主を大事子が可愛さ由ない手形なんぼう後悔仕る、それにつき其時分、娘子共が道頓堀にて取違へ歸りたる、笠を此比取出せば頂きの下に此文有、御詮議なされ清十郎が科を輕め下され」と、涙を流して訴訟する「それへ是へ」と取上げて披見ある「幸便に任せ一筆啓上せしめ候、此度お夏さま嫁入道具の代金、百四十兩の内百廿一兩爰許にて鹽問屋へ相渡し、貴様の損銀残らず相濟し即ち請取手形、殘金十九兩の上ばし申候追附御下り待人候、但馬屋勘十郎殿參る同源十郎、何と此手跡相違なしや」と仰ける、九左衛門一見して、「相果し源十郎が筆、判形共に疑ひなし、サア返答あるか勘十郎御前にて申せ」と責め付ければ、勘十郎少も怯まず、「尤我ら私商損金の流用に、道具の代金暫らく取換へ置たれ共、追付右の金は才覺

○熊坂の長範 大盜賊である。承安四年の春、京都の商人吉次僅萬が陸奥に下る途甲、長範其の貨を奪はうと思ひ、手下の大勢を率ゐて、美濃國青森で吉次の宿處を襲ひ、半若丸の爲に殺された事は、舊曲「熊坂」にも見えてゐる。

○石川五右衛門 關太閤の頃にゐた大盜賊である。文祿の末捕へられて釜煎の刑に處せられる時に、「石川や澄の眞砂は盡くるも、世に盜人の種は盡くまじ」といふ辭世の歌を詠んだといふ。近松の作に、石川五右衛門のこゝを書いた「傾城吉四郎」といふがある。

○腮が過ぎて おとがひ(腮)が過ぎて。口が過ぎて。

○任脈 命陰(肝門と陰部との間)から腹の中央を通る血脈。「和漢三才圖會」卷十一、經絡部に「任脈」に任(妊)富姓也、行(腹)部中行、爲(婦)人人生之本、奇經之一也、任脈與(脊)脈一源而二統、(骨)則由(會)陰而行背、任則由(會)陰而行腹」。近松作「卯月の潮色」中之卷に「にんみやく筋を四つ五つ繋をかくて刺し通し」。

して道具屋へ濟し置く商ひの習ひ廻り銀のなき時は、機轉を利かせ表裡を使ひ主人の銀を手前へ加へ、自分の銀を主の銀に廻し間に合するは、世間共に手代の習ひ我らばかりに限るでなし、あの清十郎は傍輩を切殺し、金七十兩盗み取是も手代の習ひか、エ、残り多いまそつと早ふ生れたら、熊坂の長範か石川五右衛門が手代にせば、よい給分を取らふ物を」と憎體にこそ申けれ、今を最期の清十郎眼をくはつと見開き、やい／＼勘十郎廣い世界を己れが口から、世間手代の習ひとは腮が過て聞にくい、悪い事を習ひと言はゞ主殺し親殺し、屋燒き強盜世間の習ひと許そふか、人を殺せば我身も死ぬる、此清十郎が七十兩や八十兩の金に換へる命でなし、且那の御恩お夏さまの情に棄てふと思ふ身を、己れが口一つにて勘當させた其恨み、己れをたつた一討ちに仕舞はふと思ふたに、爲損なふて口惜しし、エ、／＼無念な口を利かするなあ、ハツ／＼我ら故にお夏さまの自害、御恩の且那の憎しみもさぞや増らん情なや、此年迄の御面倒御恩を報する事もなく、御苦勞を懸くる事はぞ黄泉路の障りと成、是親父さま妹共」と、呼び向け顔をじろ／＼と言ひたき事の有そうに、目は働けど息切れに任脈絶ゆる兩眼より、涙ば

○引負ひ 人の金を預けて自分が融通し、損失をして其の責を身に引受け。近松作「女殺油地獄」中之巻に、「主人の銀四ツ寶三貫目餘り引負ひ。」

○代官 (見索引)

○わだかまり 曲けて私わたくしし。著服し。「櫻洲茶」に「わだかまる曲屈わだかまる」の語なるべし、俗に私曲の意にもいへり。

○仕置 處刑。

○一念發起 佛果を得よう爲に、佛道に對して一度起す信仰をいふ。

○塗らん 罪を塗附けよう。

かりを暇乞ひ、親子他人の隔てなく皆々哀れを催せり、左治右衛門涙を流し「申殿様、勘十郎がお主の金を引負ひし、我らを瞞した儘な證據出るからは、七十兩も彼奴が盗みに極つた御詮議なされ清十郎を御助け下され」と大聲上てぞ申ける、代官職聞給ひ「尤々、不便なれ共清十郎は人を殺せし、白狀紛れなき上は斷罪遁る、所なし、又勘十郎が七十兩盗みしといふには證據なし、然れ共勘十郎己れ一日主人の金子を蟻まり、清十郎親子に無實を言懸け、迷惑させし不屈元皆己れが悪心より、事起つてお夏も自害に及びたり、主殺しとも言ひつべし、きつと仕置に行ふべきが、手を出して人も殺さず盗人に極る證據なければ、慈悲をもつて助け置く命の代りに髪を剃し、出家して彼等が菩提を弔ふべきか」と仰ける、「ハア、有難し」と勘十郎頭を地につけ三拜し、小刀抜いて髻よりふつと切つて棄てければ、ヲ、神妙く佛弟子と成たれば、たとへ誠の科有てもいよく命は取り難し、此上は汝が行末彼が後生の爲ぞかし、和睦して怨みを晴させ往生させよ」と有ければ、勘十郎一念發起して「是清十郎、今は我も懺悔せん、彼の七十兩の小判は此勘十郎坊主が盗んで、源十郎めに塗らんと思ふ折ふし、斬られ

○切繩 重罪人を縛する繩の掛け方。即ち繩を適度に切つて別々に縛るのである。

○菩薩の數二十五歳 二十五菩薩は、(1)觀世音、(2)大勢至、(3)藥王、(4)藥上、(5)普賢、(6)法自在、(7)師子吼、(8)陀羅尼、(9)虚空藏、(10)德藏、(11)寶藏、(12)金藏、(13)金剛藏、(14)光明王、(15)山海慧、(16)華嚴王、(17)衆寶王、(18)月光王、(19)日照王、(20)三昧王、(21)定自在王、(22)大自在王、(23)白樂王、(24)大威徳王、(25)無邊身、以上の二十五の菩薩をいひ、阿彌陀佛の眷屬である。極樂に往生する者は其の臨終に、阿彌陀如来が二十五菩薩を率ゐて來迎されるといふ。

○花の帽子 經(はな)色の帽子。即ち淺葱の少し淺い色の帽子で、其の形は衣の袖に似、おもに僧侶僧尼の被つたものである。(後には大阪では、一般に年増女の被り物となつて流行した)。

○笠がよく似た 向ひ通るは清十郎やないか、笠がよく似た云々(既出)の歌の句に據つた。

○阿彌陀笠 笠を仰いで後方へ被ること。(見索引)

○彌陀の御國に生れける お夏が白熱の戀から純真無垢の愛に變り、尼法師となつて心も佛の御國に生れ變つたといふ意。これにお夏の追福によつて清十郎も、極樂淨土に往生を遂げた意をきかせた。(この文は「笠」を「彌陀」を重ねた文飾。

しを幸に其方に負せたり、怨みを晴れて成佛あれ跡弔はん」といふ所を、「扱こそ盗人顯はれたり其奴括れ」「承る」と、踏つけく腕捻上げはや切繩にぞ掛けてける、「直に國中引渡し獄門に切懸げよ」と、引立つれば妄執も晴れつ、清き清十郎、臨終顔も菩薩の數廿五歳の命は消へて浮名は今に残りけるお夏も其にと取附を宥め伴ひ立歸り、其夏衣墨に染め、年忌、くの手向草花の帽子に修行の笠、笠がよく似た阿彌陀笠彌陀の、御國に生れける